
COBALT-SERIES
彩雲金の暁闇7
うこんのぎょうあん
破妖の剣6
前田珠子
集英社

COBALT-SERIES

破妖の剣　6

# 鬱金の暁闇 7

前田珠子



集英社


破妖の剣


破妖の剣



COBALT-SERIES

破妖の剣　6

# 鬱金の暁闇 7

前田珠子

集英社

# 目次

## 鬱金の暁闇 7


第二十二章　密やかに動き始める……13
第二十三章　光糸の柱……63
第二十四章　明かされるもの……113
第二十五章　絡み、縺れる……159
あとがき……197

# 破妖の剣　鬱金の暁闇

## これまでのあらすじ

創造神ガンダルの生み出した世界、ガンダル・アルス。人々は複数の命と強大な力を持つ魔性たちに脅かされていた。彼らに対抗できる力を持つ人間たち――封魔の力を持つ捕縛師、滅魔の剣に選ばれた破妖剣士、魔性を味方に引き入れる力を持つ魅縛師――が「浮城」に集い、魔性との闘いに尽力していた。

ラエスリールは、金の妖主を父に、かつて城長だった魅縛師を母に持つ少女。浮城屈指の破妖刀「紅蓮姫」に選ばれた彼女は破妖剣士として著しい活躍をするが、闇主という謎の魔性に愛され翻弄され、魔性として生きることを選んだ弟・乱華には歪んだ執着心で追いかけられ、彼女にはなにかと切れぬ絆や因縁がつきまとうのだった。

翡翠の妖主の守護者の罠によって浮城を追放されたラエスリールは、数々の死闘を繰り広げ、この世に五人しかいない妖主の一人、翡翠の妖主を滅ぼす。父の配下の魔性に命を狙われ、浮城で編成された紅蓮姫奪還チームに追われ、行き場のなくなったラエスリールは、闇主とともに逃亡していた。しかし突然現れた父によって喉元に手をかけられ、仮死状態に。その肉体は浮城最奥の氷室に紅蓮姫の「鞘」として収められる。抜き身の紅蓮姫の新しい使い手として選ばれたのは、紅蓮姫奪還チームの一人で、紅蓮姫のかつての恋人の生まれ変わりであるアーゼンターラだが、思うように闘うことができない。そんななか、密かに誕生した第六の妖主（雛の君）が次々に妖主たちを配下に従え、ある目論見を現実のものにしようとしていた。一方で、死んだはずのラスの母が遂にラスを目覚めさせ、その力を開放しようとしていた――!!

## 妖主たち

**金** **王蜜の妖主**
ラスの父。最愛の妻を亡くして以来、姿を消す。

**赤** **柘榴の妖主**
クセ者ぞろいの妖主たちの中でもかなりの強者。

**緑** **翡翠の妖主**
夢に通じる力を持つ。ラスによって滅ぼされる。

**第六の妖主（雛の君）**
緑の妖主の死により現れた新しい妖主なのだが…。

**白** **白焔の妖主（白煉）**
熱に通じる力を持つ。一時期人間だった。



**紫** **紫紺の妖主（藍絲）**
糸に通じる力を持つ。白煉に執着している。



夫婦？

娘

息子



**ラエスリール（ラス）**
破妖刀「紅蓮姫」の使い手。半人半妖で魅了眼を持つ。不器用な性格。

懐いている



**邪羅（ザハト）**
妖主夫婦の息子で、ラスを姉のように慕う。



**アーゼンタータ（ターラ）**
現在「紅蓮姫」の使い手だが、悩みも深い。

**リメラトーン（トーン）**
妖貴の大火で生き別れになっていたターラの弟。

双子



**スラヴィエーラ**
破妖刀「夢晶結」を操る、破妖剣士の少女。

**オルグァン**
破妖剣士。「氷結斬」と呼ばれる破妖の斧を使う。

**マイダード**
捕縛師。自らの刺青に魔性の命を封じ込める。

## 紅蓮姫奪還チーム

# 破妖の剣 人物相関図

親友

**チェリク(リーク)**
浮城の元城長で、伝説的魅縛師だが妖主と結婚。

夫婦

**マンスラム**
浮城の前城長。ラスを養女として育てた。



息子



**濫花(リー)**
ラスが拾った半人半妖の少年。乱華に酷似。



懐いている

**アーヴィヌス**
現在の城長。かつては捕縛師として活躍した。

**乱華(リーダイル)**
ラスの弟。魔性として生きる超弩級のシスコン。



護り手

**セスラン**
捕縛師。人あたりはいいが、実は食わせ者!?





**闇主(千禍)**
ラスの護り手。壮絶な美しさと極悪非道な性格は魔性のなかでも群を抜く。

**彩糸**
リーヴシェランを溺愛する美しく聡明な護り手。

**サティン**
面倒見のよい捕縛師。ラスの姉のような存在。



護り手



**リーヴシェラン**
琴の音を用いる魅縛師で、気の強い美少女。

ししかんし?

## 浮城における ラスの理解者たち

イラスト／小島　榊

# 第二十二章　密やかに動き始める

# 1

浮城に存在する転移門のひとつ――ゼラス国境の街にほど近いそこを出てから、半日ほどの距離をクエラで移動して辿り着いたのは、人工物など何もない、一面緑に覆われた草原であった。

ナムラーダムは草原を吹く風に紅茶色の髪を靡かせながら、背負っていた荷物――二胡を取りだした。

ともに来た三人――万が一に備えて、こうした場合、実力のある捕縛師が同行するのだ――は、そんな彼女の様子を少し離れた場所から見守っている。

いよいよだわ、とナムラーダムは思った。

これから自分はこの二胡の音で、浮城の護り手となる魔性を搦め捕るのだ。

緊張していないとは言えない。何しろ彼女が単独で護り手を集めるのは今回が初めてなのだ。過去三度は、先輩の魅縛師が一緒で自分は補佐に過ぎなかった。

ようやくひとりで集めることが認められたのだ。緊張より興奮のほうが大きい。

ナムラーダムは魅縛の道具である二胡を丁寧に調弦し始める。

焦りは禁物だと、くどいほどに先輩から言い聞かされている。子供ではないのだから、そう何度も言われずともわかっている——と、聞いた時には思ったものだが、今はその必要性が痛いほどにわかる。

自分、ひとりなのだ。自分の魅縛が十全でなければ、浮城は新たな護り手を得ることはできない。最近は随分護り手の数は増えたという話だが、それでもまだ充分とは言えない。破妖剣士や捕縛師が魔性と対峙するために、護り手の存在は必須だというのに、浮城にはまだ護り手を持たぬ者が少なくない。

彼らのためにも、そして魔性に苦しむ多くの者たちのためにも、自分は万全の態勢で事に当たらなければならない。

びぃぃん、と弓を走らせた弦が音を奏でる。

駄目。これではない。この音ではない。

ぴぃぃん。

これはいい。けれど強い引力はない。

もっと、もっと魅縛の力に溢れた音を——弦の何処を弾いても力に溢れた音色が溢れ出すよ

うに――丹念に、彼女は音を調えつづける。
そして、その音は唐突に訪れた。
ピィィン……ピィィン……ィン。
見つけた――ナムラーダムの口元に笑みが浮かんだ。
脳裏に響くのは、今見つけた音を核とした旋律だ。流れるように、渦巻くように――魔性の心を捕らえ、魅了する魅縛の曲。
いける。
ナムラーダムは顔を上げ、三人の捕縛師たちに頷いてみせた。
それを合図に、三人が彼女からさらに距離をとり――不意にその姿を消した。彼らの護り手の術により、魔性にすら気取られぬ隠形を果たしたのだ。
姿と気配が消えただけで、三人はそばにいる――もし自分が失敗したとしても、彼らがすぐに駆けつけてくれる。だから自分は安心して二胡に集中すればいいのだ。
「大丈夫」
小さく、ナムラーダムはつぶやいた――自分に言い聞かせるために。
わたしはやれるわ。
胸中でつぶやき、彼女は弓を走らせ始めた。

『気負いすぎないようにね』

先輩の捕縛師の言葉は、この時ナムラーダムの頭にはなかった。

ひとりでも多くの護り手を得るために、彼女は自身の最高の曲を奏でることだけに集中していたのだ……。

※

楽しいことになりそうな予感がする。

その音色が風に乗って聞こえて来た時、彼女はそう思った。

ただ、その楽しみがどんな種類のものなのかまではわからない。ただ、これまで自分が感じたことのない何かが起こるのは間違いない。

「一体なにが、わたしをこうも揺さぶるのか……この不思議な音色？　それとも風に混じる気配？　それとも――」

未だにわたしが気取れぬ何かがあると――？

その可能性は果たして高いのか低いのか。あるいは在りもしないものを期待しているだけなのか。

どちらにせよ、ここにいるだけでは何もわかりはしない。出向いた先にこそ、その答えはあるのだから。

「音色の正体について想像はついているが、さて、どうやって遊ぼうか……」

間違いなくこれは魅縛師が弾く琴の音だ。

魔性の心を惹きつける力に満ちて美しい。

心地よい調べはまだ止まりそうにない。このまま曲が終わるまで楽しませてもらうのもひとつの手ではあるが……それだけではつまらない。

「何かがあるのならば、それを見てみなければ――ね」

彼女はそうつぶやき、音色をたどった。

さして離れておらぬ場所に、件の二胡の弾き手の姿を認め、彼女は小さく目を細めた。

なかなか楽しそうなことになりそうな顔をそこに見つけたせいだった。

さあ。

彼女は気配を殺したまま、これからの成り行きを見守るために腕を組んだ。

浮城の魅縛師よ。お前はこの先どうするつもりか――見せてもらおう。

くつり、と喉が鳴る。

愉快なことになりそうな予感に、彼女は声にならぬ笑い声を洩らした。

※

ナムラーダムの二胡が一曲目を弾き終わろうという頃、望んだ変化がその場に起こった。
そろり、そろりと音を消して近づいてくる者、風に乗って飛来する者、地中から姿を現す者——目に見えるだけで五つの人影が、彼女の周囲に現れていた。
遠目にはわからないが、それが人間でないことはナムラーダムには明らかだった。人間にはあり得ないほど異形というわけではない。しかし彼らの気配——洩れ出る妖気が彼らが何者であるかを何より雄弁に物語っている。
来た。
緊張に一瞬だけ弓を握る指に力がこもり、不要なまでに強い音が零れた。
駄目。調べを乱しては駄目。
音の連なり、流れが彼らの意識を搦め捕る糸となり網となる——調和を乱す音は綻びを生み出しかねない。
ナムラーダムは気を引き締めながら、奏でる旋律に集中した。
そろり、そろりと妖気の塊が近づいてくる。その足取りがふらふらと覚束ないものであるこ

とが彼女を少しだけ安心させた。

効いている——というのは聴き手に対して失礼だろうか。

だが、他に言いようがない。ナムラーダムの二胡の音色に、魔性たちは明らかに酔っているのだ。その度合いがいかほどかは、今はまだ計りかねるが、前提として音色を気に入られなければ、彼らを味方に引き入れることはできないのだから、この安堵は間違ってはいないはずである。

大丈夫だ、と彼女は自分に言い聞かせた。

大丈夫、彼らは確かに自分の二胡の音に魅かれている——だからもっと強く魅きつける。魅きつけて魅きつけて、そうして搦め捕るために、次なる音を、その連なりを。

風に乗せて、ナムラーダムは弓を操る。

一番最初に膝をついたのは、狼の耳に似たそれを持つ少女だった。

妖鬼だ。人間と違う異質な部分は、耳を除けば豊かで美しい毛並みに覆われたふさふさの尻尾ぐらいで、これは妖鬼の中でも上位に位置すると一目でわかる外観の主だ。

ナムラーダムの奏でる二胡の音にうっとりと目を細めながら、彼女の正面に跪いた。

それが合図というわけでもなかったろうが、ひとり、またひとりと集った妖鬼たちが少女のそばで膝をついた。

皆、ほんの少ししか異形の徴を持たない妖鬼たちだ――人間に近い姿を持つ妖鬼ほど強大な力を持つとされる魔性にあって、今回の五人はいずれも上位妖鬼と言っていい。これだけ力に溢れた者たちなら、護り手として文句なしだ。

必ず、説得してみせる。

固い決意を胸に刻みながら、ナムラーダムは弓を最後に大きく弾いた。

甲高い女性の歌声にも似た音が、長く長く響き渡る。

その余韻までも充分に味わった後、狼の耳の少女が陶然とした表情のまま、彼女に従うことを誓った。

自ら真名を差し出し、その名にかけてナムラーダムに仕えると言いきったのだ。

ナムラーダムはうなずき、それを許した。

次に名乗った妖鬼にも、その次に名乗りを上げた妖鬼にも、彼女は同じことを繰り返した。

四人目の妖鬼には、演奏中のちょっとした力みを指摘され、更なる精進を望むとまで言われた。ナムラーダムは苦笑しながら、その言葉にうなずいた。音の乱れが魅縛の妨げとなる可能性がある以上、これは確かに気をつけるべきだと思ったのだ。

そして、五人目――一番最後に膝を折った妖鬼が自らの真名を口にした時、ナムラーダムは今回の自分の務めが成功したことを疑わなかった。

「灰牙」

そう名乗ったのは五人の中でも一番人間に近い姿の妖鬼だった。

二十代半ばに見える屈強そうな男の手の甲に生えている漆黒の石さえ隠し、さらに妖気を抑えれば、人間の中で暮らしても気づかれないに違いない。

「あなたに仕えよう、浮城の魅縛師よ」

重々しい口調で告げられ、ナムラーダムは「許しましょう」と応じた。

同じような問答も、これで五度目だ。気を抜いているつもりはなかったが、緊張がどこか一部緩んでいたのは否定できない。

「どうか、我が名を受け取り、最初のご命令を――我が君」

大仰な言葉に、またしても苦笑が浮かぶ。

「大袈裟な物言いはあなたの癖なのかしら、灰牙？」

それは――一瞬の、そして致命的な油断と失策だった。

次の刹那、灰牙の太い腕が鞭のようにしなったかと思う間もなく、異常に伸びたその太い五本の指が、ナムラーダムの喉をぎちり、と摑んだのである！

「な……!?」

なにを――言いかけた声は喉を潰さんばかりに締め上げられて言葉にならない。

「未熟な魅縛師よ……見極めることもできぬ愚か者よ」

灰牙が冷ややかな声を紡ぎながら、ナムラーダムの首を摑んだままその体を宙づりにする。

「本当に、お前程度の未熟な腕で、このわたしを搦め捕れると思うたか？　乱れがちな音律、気負いを隠しきれぬ音色……なまじ好ましい音である分、耳障りな響きが癇に障って仕方なかったぞ。そこにいる輩どもは知らぬがな」

喉に喰い込む爪が、ナムラーダムの皮膚を薄く切り裂く。

痛みと衝撃と――そうしてゆっくりと恐怖が胸に染みこんでくる。

それと同時に、脳裏に甦ったのは先輩捕縛師の顔だった。歌声を武器とするその女性は、常々『気負いすぎないように』と彼女に繰り返していた。

『気負いや力みは自然な流れを妨げるものだから。それがアダになって魅縛に失敗することもあるのよ。私も何度もそれで失敗したのよね。無心で臨めというのはまだ無理かもしれないけれど、流れを崩さない演奏を心がけることね』

と。

最初に言われた時はともかく、事あるごとに繰り返されるようになってからは「わかっています」と受け流すようになった。何度か経験を積んだことで、魔性を味方につけることに慣れかけた意識は、以前ほど真摯にその言葉を受け入れようとしなかった。

慣れるということは恐ろしいことなのだとも、その先輩は繰り返していた。
気をつけているつもりでも、気づかず油断することが多くなるものだから、と。
くどいほどに言い聞かされていたことを、いつしか右から左へと聞き流していた——その油断が招いた事態だった。
馬鹿だ、わたしは。
喉を絞めつける力は少しずつ増していく。
たとえ名乗られても、浮城に帰還するまでは決してその名を口にするなと言われていたはずなのに。
浮城の人間を憎む魔性は多い。
中には魅縛されたふりを装い、魅縛師を手にかけようとする者もいないわけではないのだと、確かに注意されていたはずなのに、勝手にもう大丈夫だと判断し、詰めを誤った。
「お前程度の魅縛師に、わたしが名を呼ばせると思うか。虫酸が走る……何度聞いても耳障りなものだ。これから引き裂く楽しみがなければ、到底我慢できるものではない」
言うなり、灰牙の腕が伸びたときと同じだけ唐突に縮んだ。
ひゅん、と風を切ってナムラーダムの体が宙を舞う——このままでは地面に叩きつけられる！

灰牙は容赦しないだろう。声に宿る冷酷な響きは、その一撃で終わりにはしないことを告げてはいたが、この時の彼女にはそれは救いではなかった。

引き裂く楽しみ――。

灰牙のそれは、どの程度時間をかけるものとして想定されているものか……だが、背後の捕縛師たちが駆けつけてくるのに気づけば、きっと彼は手短に遊びを終わらせる。あるいはどこかに連れ去った後、じっくりと時間をかけて嬲るつもりなのか。

怖い――怖い、怖い！

喉が無事なら、ナムラーダムは悲鳴を上げていたに違いない。

「だ……か……」

誰か。

一緒に来てくれた捕縛師は誰と誰だったろう――見習い期間も含めて、彼らの援護が必要だったことが一度もなかったせいもあり、軽く挨拶しただけですませていたのが悔やまれる。

彼らの捕縛術がいかなるものか把握していれば、どれほど時間を稼げばいいのかわかっただろうに――いや、そこまで気を配っていたら、今回のような失策は犯さなかった。

誰か、誰か、誰か――助けて！

声にならぬ叫びを上げたナムラーダムの体が大地に叩きつけられる――まさにその寸前。

聞こえてきた声が誰のものであったのか。

彼女にはわからなかった。

甲高い少女のそれは、自分よりいくらか若いものだった。

それでいて、そこに宿る力は圧倒的だった。命ずることに慣れた強者の声は、その場全体を支配した。

「そこまでよ、灰牙。彼女を傷つけることは許さないわ」

……ナムラーダムの体が大地に打ちつけられる瞬間は、ついに訪れなかった。

# 2

「いやあ、あの時は正直びっくりしましたね。わたしも捕縛師としての派遣は何度か経験してましたが、護り手引き抜きの援護というのは初めてでしたからねえ。魅縛されることに抵抗する跳ねっ返りもいると聞いてましたから、どの時点でどう助け船を出したものか、見極めがつかずにおろおろしているうちに、いるはずのないチェリク様が大見得きってくださって……」

当時のことを懐かしむような目をしたセスランがしみじみとした口調で語るのを、ラエスリールは複雑な心境で聞いていた。

セスランは幼い自分を浮城に連れて行ってくれた恩人だ。

彼が手を差し伸べてくれなければ、闇主との出会いの記憶を持たなかった当時の自分は、行き場もなくどうなっていたかわからない。いまでもはっきりと思い出せる出会った時の彼の優しい笑顔——。

だが、彼やその周囲と馴染むうちに、わかりたくなくとも理解せざるを得なくなったことも

少なくはない。

学習した、ともいう。

その中で最大のもののひとつに数えられるのが、セスランの性格である。

はっきり言って一筋縄ではいかない。

クセが強い。

何であれ面白がる傾向が強い——常人の感覚では洒落にならないところまで許容範囲に入っているような気がするのは錯覚ではないと思う。

ラエスリールにとって彼は恩人であり、困った時にいつもサティンとともに救いの手を差し伸べてくれる『いいひと』だったから、浮城にいた頃は考えたこともなかったが——浮城を出奔して数年になる間の様々な経験は、そうした客観的認識を育てるに充分なものがあった。

そして、その新たに獲得した認識でもって彼の話を聞いてみれば、だ。

なんだろう……ぎりぎりになるまで、手出しを控えていたような印象があるような、ないような……気のせいだろうか。

「はあ……」

だから、ついぐるぐるした気分のまま、気のない返事をしてしまったのだが、セスランはいつもならすかさず入れる突っ込み——「聞きたいというから話しているのに気のない様子です

ね」とか「ラスには興味のない話題でしたか？」とか――を忘れた様子で、実に実に楽しげにその時のことを語り続けた。

「いきなり、名乗ったばかりの妖鬼の名前を呼ぶなんて……まあ、ナムラーダムは経験不足だから情状酌量の余地ありの失態ではあったんですがね、まさか援護班の一員がそんな愚を犯すだなんて考えられないことだったんですよ。いやあ、あの時はわたしも『こんな物知らずを援護班に組み入れるなんて、城長何を考えてるんだ！』とか脳内ではもう盛大に文句垂れまくりでしたよ。当時の城長は堅実で知られる性格の人でしたし……その人が何でこんな考えなしなことを、と八つ当たりしまくりたい気分でしたね、正直」

魔性の名乗りは罠か挑発である場合が多い。

名乗られたからといって素直にそれを口にするのは多大なる危険を伴う行為であることは、浮城に籍を持つ者はいやというほど言い聞かされるものだ。

だから、話の中で母がやったという暴挙にセスランが怒りにも似た苛立ちを覚えたということは理解できる……が。

その状況を鑑みると――だ。

初めて護り手を獲るために人里離れた場所に出かけた魅縛師であるナムラーダムというひとが、成果を上げた結果一瞬気を抜いて『名乗られた』魔性の真名を口にするという過ちを犯し

てしまった。そのことには怒りを覚えず、いつの間にか同行していた経験――ある程度――豊かな同僚の同じ過失には強烈な怒りを覚えた――と、いうことは、だ。

セスランさま、もしかして、素人や初心者には優しいけれど、ある程度経験を積んだ相手には人一倍厳しい……のか？

感じたことに、ラエスリールはぞくりとするものを覚えた。

いつも、いつも、捻りを利かせたものではあっても、セスランはラエスリールに対して優しい態度を崩さなかった。

それは、自分の未熟さを物語る何よりの証ではないのか。

最強の破妖刀と呼ばれる紅蓮姫と組んだ時でさえ、優しさを見誤る隙さえなく注いでくれたセスラン……では、あれは。

恐らく、表情にその動揺は表れていたのだろう。

それまで実に楽しげだったセスランの瞳が――滅多にないことに――動揺に揺らいだ。

「ラス」

しかし、それも一瞬で彼女に声をかけた時には声も表情も普段のものに戻っていた。

「あなたが今何を思ったのか、想像できないこともないのですがね、勘違いしないでください。これはあくまで過去の話ですよ、当時のわたしが考えたことを今のわたしに重ねられては

困ります。それじゃあ、わたしが何十年も人間的に成長していないということになってしまうじゃありませんか」

さすがに少しぐらいは進歩してるつもりですよ？

苦笑交じりに言われ、ラエスリールは思わずうつむいた。

見抜かれている――。

「すみません。別にそんなことを考えたわけでは……」

ああ、やはり自分はまだまだ到らない――。

顔が赤くなるのを感じながら、ラエスリールは小さなため息をついた。

「自分を過小評価するクセはそろそろなくなったかと思っていたのですが、まだ時々顔を出すようですね。心配になります……あまり年寄りに心労をかけないでください」

出会って以来十年以上変わらない外見の主――聞いたところ彼の子供時代を知っている人間は浮城にはすでに数えるほどしかいないらしい――の口から飛び出した『年寄り』という言葉に、ラエスリールは思わずむせそうになった。

いくら何でも……そぐわなさすぎる。

「セ、セスランさま……どうか、言葉はもう少し選んでください！」

「……そうですね。自分で言っていて少し悲しくなりました。ですが、言っていることは本当

ですよ。あなたはこれからあのおふたりと行動をともにすることになるのですから、そんな態度を見せるべきではありません。何しろあなたのご両親を熱く信奉してらっしゃるようなおふたりです。怒濤の勢いで態度を改めるように詰め寄られること請け合いです」

あのおふたり——というのが誰を指すのかを悟り、ラエスリールは知らず口元を押さえた。セスランの言う通り、両親のことを熱烈に慕っている様子の宋流と空也は、ラエスリールが『姫君』呼ばわりにいつまでも慣れないことに苛立ちを隠さないのだ。

『もっと泰然となさってください！』

と、感情的な声で訴えてきたのはどちらだったか……そんな彼らの前で、自分の未熟さを嘆くような真似でもしようものなら——あの両親に恥じない超然たる魔性の姫君ぶりについて、どこまでも熱くとうとうと語られるに違いない。

考えるだけでめまいがする。

「気をつけます」

としか答えようがなかった。

何しろセスランはこれから浮城に戻るのだ。衣於留による依頼人関係者の記憶操作によって稼いだ時間も底をついた。余計な不審を買わぬため、彼らは一度浮城に戻らねばならず、当然のことながら出奔した自分が一緒に行けるはずもない。

「はい、本当に気をつけてくださいね。あなたは押しが弱い部分があるので、相手の情熱に流されて彼らの期待に応えようと頑張りそうなところが一番心配です。いやですからね、次に会った時、あなたが邪羅くんのご母堂や魔性を前にした時のチェリクさまそっくりになっていたりしたら」

脳裏に浮かんだのは白焔の妖主の姿である――誇り高く毅然とした立ち姿は息を呑むほど美しく、傲慢な物言いさえその魅力を引き立てるものでしかない……。

魔性を前にした母の姿は知らないが、セスランが白焔の妖主と並べて挙げた以上、実に魔性好みなのに違いない……生前の母は穏やかで優しいという記憶しかないが、魔性と対峙した時は、自分たちの知らない顔をしていたのだろう。

「……セスランさま。その心配は無用かと……人間にはやはり、できることとできないことがあるわけですし……」

あんな風になれと言われてなれるものではありません。

絞り出すように洩らした声に、しかしセスランは疑わしげだ。

「そうですかねえ？　あなたも譲れないことが絡むと相当頑固で手強いと思うのですが。妖主と対峙して戦意を放棄しないどころか挑発までできるんですから、素質はありすぎるぐらいあると思いますよ、わたしは」

でも、そうはならないでくださいね――構い倒して反応を楽しめなくなるのはいやですから。

恐ろしく身勝手なことを言われたような気がして、ラエスリールは固く目をつむった。頭痛がするのはどうしてだろうか。

「……セスランさま。話がずれてます」

これ以上自分に関する話題で混乱させられたくなかった彼女はようやくそう告げた。

さすがにセスランもそれ以上突っ込むつもりはなかったのか、「そうでしたね」と頷いて話を元に戻してくれた。

ほっと息をつくラエスリールに、セスランはまたとんでもないところから昔話を再開してくれた。

「当時のチェリクさまは、まだご自分の護り手を持ってらっしゃらなかったんですよね。依頼地に赴く時は、必ず破妖剣士のイズヴァンさまとご一緒でしたから、急いで選ぶ必要もなかったということもあって。あの時は確か、イズヴァンさまが怪我の療養のために浮城を離れてらしたんです。お目付役がいないのをいいことに、援護役に選ばれた捕縛師のひとりと交代して『引き抜き』の現場を見物にいらしてたんですよ。今後の参考にとか仰ってましたけど、何をどう参考にするつもりだったのかは未だに謎です」

恐ろしい話だ――護り手を持たぬ身で、魔性と対峙するなど普通考えられることではない。

自分の初めての依頼に護り手なしで向かったことは綺麗に棚に上げてラエスリールは驚きに目を瞠った。

「そんな……母さまに護り手がいなかっただなんて、初めて知りました。いったいどうして……わたしのように破妖刀に選ばれていたわけでもないのに……」

その言葉に、セスランが堪えきれないと言わんばかりに噴き出した。

「チェリクさまの場合、選ぶに選べなかったというのが正しいですね。何分にもあの方の魅了眼は強力すぎました。彼女が捕らえた妖鬼の誰かを護り手に選んだ瞬間にも、選ばれなかった他の全員でその妖鬼を引き裂きかねない状況でしたから、そうした事態を避けるためにも、あの方は護り手を長いこと選ばれなかったんですよ。いつもなら、イズヴァンさまとその護り手の香林がそばにいるから問題はなかったんですがね、その時は単独行動でしたから、そのことに気づいた時はさしものわたしも肝を冷やしました。あの方の魅了眼の威力は話でしか聞いたことがなかったものですからね。実際に目にして初めて護り手不在の身で平気で最前線に立てるわけだと呆れるやら感心するやら……まあ、あの時ですね、このひとは絶対敵に回してはいけないと心に誓ったのは。何しろ、数十年に渡って何人もの魅縛師を殺してくれた妖鬼を実にあっけなく塵に帰してくださいましたからねえ……」

わたしの中の皆も、あれを見てからずいぶん協力的になってくれたものです。
あっけらかんと告げられた内容に、ラエスリールはまたしてもくらりとするものを覚えた。
護り手になりたがる妖鬼が多すぎて選べなかったという母。
セスランの内部に封じられた妖鬼たちを、大人しくさせたという母。
慕われているのか恐れられているのか——どちらにしても生半ではない。
自分の知っている母とは違いすぎて、まるで母がふたりいるような錯覚に見舞われる。
もしも——考えずにはいられない。
もしも母が魅了眼の力を失わず、病に冒されることがなかったら、彼女はセスランが語ったような女性のままだったのだろうか。淋しげに微笑むこともなく、ことによっては父とすら衝突するような苛烈な姿を見せていたのだろうか。
そんな思いが伝わったのだろう——セスランがぽん、と彼女の肩に手を置いた。
「あなたの知っているチェリクさまとは全然違っているように感じられるかもしれませんが、あの方はどんな時でも優しかったことだけは間違いありませんよ。殊に力を持たぬ弱いひとたちを護るためなら、死力を尽くすことを躊躇わなかった……結果としてその異質なまでの力を恐れられ、護った相手から忌避されることになったとしても、あの方は常に力を惜しんだりはしませんでした。わたしは心から、そんなチェリクさまを尊敬してますよ」

はっとするほど真摯な声で告げられて、ラエスリールは目頭が熱くなるのを感じた。
胸の奥がもぞもぞするのは、内で聞いている母の感情だろうか。
だが、そこで感動的に話を締めくくらないあたり、やはりセスランの性格には捻りが入っている。
「……まあ、その分使えると判断した相手に関しては容赦なしでこき使ってくださいましたけどね。あの方が城長に就いて以降、わたしの仕事量は誇張なしに倍増しましたよ。金は貯まるだけで使うヒマなぞありませんでした。あの頃祖母がわたしのことを知っていたら、間違いなく資産運用を提案してきましたね！　マンスラムさまが後を引き継がれる時、わたしは真剣に訴えましたよ、これまでのペースで仕事を回すつもりなら、遠からず姿を隠したくなるでしょうね、と。マンスラムさまが聞き届けてくださって、本当に良かった……」
……それは訴えたというより、脅しをかけたというやつではなかろうか。
ちらりとそんなことを思ったが、ラエスリールはそれを口にしたりはしなかった。
セスランは優しい。
だが、同時にひとをからかって遊ぶのが大好きな、困った性癖の持ち主であることも事実なのだ。
雉も鳴かずば打たれまい――。

ラエスリールは賢い雉になることを選んだのだ。

# 3

「浮城を割りかけて出入り禁止処分ですって!?　いったいこの時期に、なに馬鹿なことやってるのよ、あの馬鹿な子は!?」

浮城の一室――リーヴシェランの部屋で怒声を上げたのは、護り手の青年をこき使……もとい青年に協力してもらい、監視の目をかいくぐって訪問を果たしたサティンである。

二日前に帰還した彼女は、城長への報告その他を終えたところで、出先における嬉しい椿事を報告すべく年下の魅縛師の部屋を訪ねたのだ。

椿事とは勿論、ラエスリールとの再会である。セスランの押しかけ護り手衣於留からの意味深長な誘いに乗った結果、数年ぶりに妹分と会うことができたことを、数少ない同志に伝えるのはごく当然のことであり、その際裏技を用いることにかけらの躊躇いも覚えはしない彼女である。

完全には喜べない事情であったとはいえ――ラエスリールの意識が宿っていたのが、死んだ

はずの彼女の母親の肉体で、彼女本人の肉体は浮城の氷室で眠ったままであることなどがその最たるところだが——ラエスリールはラエスリールだ。

数年間、上層部の警戒態勢に晒されつづけたせいで、満足に行方を調べることもままならず、「便りがないのは元気な証拠」だと自分に言い聞かせるしかない日々を送っていた中、突然仮死状態の空っぽの肉体だけが浮城に帰還するという、とんでもなく心臓に悪いことをしでかしてくれた黒髪の元破妖剣士は、母親の肉体に宿っていても変わらず生真面目なくせにどこか抜けた愛嬌——いじりやすさとか突きやすさと言い換え可能——はそのままに、サティンが放った愛の鞭という平手を甘んじて受ける素直さを見せてくれた。

別れている間にさまざまな体験を積み、その精神は柔軟な強靭さを得てはいたが、不器用な性格は相変わらずだった。

便りのひとつよこさなかったのも、自分よりこちらを気遣ってのものだということぐらい読み取れないサティンではない。彼女の可愛い妹分は、いつだって自分のことより大切に想う誰かのために動くのだ……それがたとえ、世界中で最も人間に害をなしてきたに違いない凶悪な魔王であろうと、懐に入れた以上彼女は気遣わずにいられない。

なんという愛しい気質——だが、それが同時にとんでもなく迷惑な気質でもあることを、果たしてラエスリールは自覚しているだろうか。

傷つくことを厭わず、譲れぬ覚悟を護るためには誰が相手であっても一歩も退かない――そんな彼女の姿をただ見守るしかできない周囲の心境を、彼女がどれだけ理解してくれているか……甚だしく疑問である。恐らく「そんな。自分ごときに」とか思っているのが想像できて腹立たしいことこの上ない。

だから、今度会ったら絶対に平手どころか拳にものを言わせてでも、自分たちにとって彼女がどんな存在なのか、胸に刻ませるつもりでいたのだ。セスランからの知らせを受けた時は、本当に拳が壊れる寸前ぐらいまでなら、「愛の教育的指導」もありだと思っていた。

だのに――だ。

再会した妹分は、あろうことか伝説的な魅縛師である実母の肉体――王蜜の妖主が手がけたものらしい――に、前回とは違い本人の意識とともに同居していたのだ！

しかもそのそばには、ぴたりと寄り添い護る妖貴がふたり。

髪一筋傷つけたが最後千々に引き裂かれてもおかしくない圧力の中、それでも平手を見舞ったのは、言うなればサティンの意地だった。どうにもそうせずにはいられなかった――やるだけやって来るなら来いという気分だった。

但し、妹分より幾分柔らかく完璧に整った美貌は、それだけで腕から力を奪ってくれる威力に満ちていたわけだが。

愛の平手を見舞った後、サティンは実は……ぼろぼろと泣きながら妹分――ラエスリールにこれまで募らせ続けてきた不満を文句に変えて訴えかけた。自分でも正直、その時のことは思い出したくない。とにかく「この馬鹿、馬鹿娘、本当に馬鹿なんだから、馬鹿すぎるにもほどがあるでしょう、馬鹿につける薬はない、どうやったらこの馬鹿は治るの」等々、我ながら語彙が乏しすぎるというものだ。

多分、その時馬鹿を連呼しすぎたせいで、そのクセがついてしまったのだ。

なのに、ラエスリールと来たら馬鹿を繰り返さずにはいられないこちらの心も知らず、大真面目に謝ってきて、言い訳ひとつ口にしようとしなかったのだ。

それは彼女の生真面目な性格による潔さだとわかってはいたが、別れたあとの出来事を本人の口から聞きたいサティンにとってはちっとも嬉しい反応ではなかった。

果ては――あれだ。

仕掛けもきっかけもわからない謎の強制終了。

そうとしか呼びようのない、ラエスリールとチェリクの意識交代劇。

あれには本当に腹が立った。立ちすぎて記憶は一切の省略なしに脳裏に刻まれてしまった。

こうして、その時のことをふと思い出すだけで――。

鮮明に、その記憶は甦るのだ……。

※

「だからね！」

実にラエスリールらしい「すまない、悪かった、迷惑をかけた」の繰り返しに、キレたのは仕方のないことだったと思う。

「わたしだって、馬鹿じゃないしっ！　いろんなところから情報はそれなりに集まったし！　それを整理整頓して何があれから起こったのか、それなりに察しているとは思うわけよ！　幸い協力者もそれなりにいたことだし！　でもね、今わたしが聞きたいのは、あなたからの謝罪の言葉じゃないの。あなたから、直に何があったのかを聞きたいの！　わたしの言葉が理解できたら、すぐにその謝罪だらけの態度を改めて、不器用でもわかりにくくてもかまわないから、あなたの言葉で事情を説明なさい！」

びしりと指をつきつけて、限りなく怒声に近い声で命じた。

……眦はつり上がっていたと思う。だが、それぐらいは仕方ないではないか。

しかし……それ以上に、ラエスリールは往生際が悪かった。

「いや、しかし……説明と言っても……わたしにも事情が全部わかっているわけではないし

……それに……」

と、そこまで歯切れの悪い言葉を洩らした彼女は、何かを思い出したかのようにはっと息を呑んだ。

非常にわかりやすい反応だった。

声にならなかったラエスリールの言葉を、サティンは正確に読み取ることができた。

それに……わたしの事情にこれ以上巻き込むわけにはいかない。

……強烈に、腹が立った。

だから、つい怒鳴りつけてしまった。以前であれば、躊躇うラエスリールをいいように懐柔したあと、必要な情報を引き出すことは難しくなかった。いや、正面から引き出すよりずっと容易くさえあったから、四方山話のついでに必要箇所に突っ込んで欲しい——同時に必要な——情報を彼女から得ていた。

彼女のあまりに異質な生い立ち、心の傷を深めるばかりの過去を前に、サティンもセスランも正攻法を望みながらも、手っ取り早い抜け道の確保をせずにはいられなかったのだ。

傷つきすぎた小さな少女——出会った頃は、誰かに心を開くことすら忘れてしまっていた。少しだけ自分たちに開いてくれはしたけれど、自分を無価値だと信じ込んだ魂は、放っておけばすぐにでも生きることを放棄してしまいそうで。

だから、彼女が意識せずに洩らす情報を得るために策を講じた。
根っから善良な彼女は、サティンやセスランの仕掛けた言葉遊びの類を、からかわれただけだと受け止めているだろう。
からかわれて遊ばれただけなのだと。
だが、そうではない。サティンもセスランも、そうとしか見えない仕掛けを打ちながら、いつだって最大限の注意を払ってラエスリールが不用意に零す情報を拾い集めていたのだ。
そのことを今さら告げて謝るつもりは皆目ない。
あの当時、それは必要なことだった。そうでもしなければ、ラエスリールのことを今現在ほど把握することはできなかった。掠め取るようなやり方であっても、彼女の情報を得ることは必須だった。
そうでなくては、彼女を護るための壁になれなかった——というのは、一部の者たちには詭弁に聞こえるだろうか。
そうかもしれない。
浮城に集められた子供たちは、多かれ少なかれ魔性の脅威に晒されたことがある。
村を灼かれた子供もいる。目の前で親しいひとを殺されたり傷つけられた子供など珍しくもない。

その際に心に植えつけられた強烈な魔性への憎悪や恐怖――それこそが、浮城の住人として最初に乗り越えるべき障壁とされる。

乗り越えて初めて一人前だ、と。

そうした意味で言うなら、ラエスリールはその壁を乗り越えてはいない。

サティンとセスランが敢えてそうさせなかったのだ――本能的な何かが、それを忌避させたのだ。

ラエスリールにその壁を見せてはいけない、と――。

根拠も何もなかったが、それは確信だった。

そうして……注意深くセスランやマンスラムらとともに、ラエスリールを見守ってきたのだ。愛しい妹分――だが、これだけはいただけない。

相手を案じるがゆえに、あえて距離を取ろう……などとは！　そんなものは自分にとっては気遣いでも何でもない。

「勝手にひとのことを蚊帳の外に置くのはやめてちょうだい！」

怒鳴りつけてからラエスリールを見ると、黒髪の美女は途方に暮れた子供のような目になった。

「いや、別に蚊帳の外とか……ただ、本当にわたしにもわかっていないことが多くて……だか

ら、その……」

魔性相手に啖呵を切るときは、大層雄弁になるという話だが、普段の会話は相変わらず得意とは言えない様子に、しかしこの時ばかりはサティンも助け船を出すつもりはなかった。

「じゃあ、取りあえずわかっていることから話しなさい。その後でわからないことを挙げてくれたら、わたしも一緒に考えてあげられるでしょう？　わたしだけでは心許ないというのなら、セスランも入れておけばいいし……そうだわ、チェリクさまは？　前回と違って、今回はチェリクさまご本人もその体に入ってらっしゃるんでしょう？　相談に乗っていただくわけにはいかないのかしら？　それとも同じ体にいても、意思の疎通が図れない、とか……？」

矢継ぎ早の問いに、ラエスリールはどれに先に答えるべきか悩む顔をしていたが、結局一番最後のそれを先に持ってくることにしたらしい。

「いや、意志の疎通はできる。先日も魅了眼の使い方を実地で指導してもらった」

実地で――て。

サティンは声を呑み込んだ。

魅了眼を必要とする実地となれば、恐らく魔性との対決時だろう――捕縛師の資格を持つラエスリールなら、紅蓮姫がない今でも無力とは言えないからこそなのだろうが、魔性と戦う娘に内側から魅了眼の使い方を指導とは――親切なやり方とは言い難い。

それとも、集中せざるを得ないということで効率的だと判断なさったのかしら？
だとしたら、伝説の魅縛師チェリクは、教師としてはかなり厳しい部類に入るだろう。
「そ、そう……じゃあ」
と言いかけたところに、ラエスリールの「だが」が重なった。
「普段はとても深いところに意識を潜らせているみたいで、会話とかないんだ。時々……セスランさまが母さまの昔の話なんかをすると、胸がざわざわしたりするんだが、それでも感情までは伝わって来ない。サティン、これはやはりわたしの意識が宿ったせいで、母さまに負担をかけているんだろうか？　もともと、ひとつの肉体にふたつの意識が宿るなど、普通では考えられないことだし……そうだとしたら」
わたしは――。
どんどん暗くなっていくラエスリールの声に、サティンは慌てずぽん、と手を打った。
唐突な音に、黒髪の女性が大きく目を瞠った――無防備な表情は、まるで子供のようだ。
「やめやめ。どうせあなたのことだから、そこで自分の存在が負担になるようなら……とか考えてるんでしょう？　あなたの考えてることが正しいかどうかはわからないけれど、チェリクさまはそんなこと覚悟の上で、あなたの意識を迎え入れられたんでしょうから、あなたがくよくよ悩むだけ無駄よ。それぐらいなら、ああ、早く本来の体に戻って、今度は生身で母娘対面

を実現させようとでも思っておきなさい」

そのほうが建設的だわ。

きっぱりと言いきると、ラエスリールは緑の瞳をさらに瞠り、まじまじとサティンの顔を見つめてきた。

「何よ？」

「いや……サティンのその決めつけを聞くのも久しぶりだと思って。ただ、記憶より言い回しがきつく感じるのはなぜかな、とか……」

そんなの。

大きく息を吸い込んで、サティンは次の瞬間叫んでいた。

「そんなの、わたしが今最高に怒ってるからに決まってるじゃないの！　だいたい、ラス、あなたも結構失礼なことを言ってるわよ？　決めつけとは何事よ。わたしは前向きな考え方を提案してるだけでしょう!?　あなたが無意味に落ち込んで、いつまでも悩まないように親切に建設的な道しるべを示してあげてるんじゃないの」

じろりと睨みつけると、目に見えてラエスリールが怯む――その様子が可愛らしく、思わずもう少し突きたいと思わないでもなかったが、何しろ時間が限られている。

やっぱり、遊ぶなら本来のラスがいいし、ねえ。

などと人の悪いことを考えていることは微塵も出さず、サティンはこれ見よがしに大きく息を吐いた。

「まあ、いいわ。それじゃあ、チェリクさまの意志を尊重しましょう。娘を想う親心を踏みにじるわけにもいかないし……」

話を聞いて智恵を出し合う面子はわたしとセスランということで。

「いいわね？」

問いかけは形ばかりで、実のところそれは確認に過ぎなかった。

「あ、ああ……」

実のところ、ラエスリールにサティンの提案を呑まなければならない義理はないのだが、そんなことに気づかせるようなへまはしない。

「なら、セスランを呼びましょう。どうせ今後の協力態勢についても、浮城の外で話し合っておいたほうがいいでしょうし、ちょうどよかったわね」

ラエスリールが面食らっている間にさっさと段取りを組むのは彼女に口を挟ませないためだった。頑固なところはとことん頑固にできている妹分は、一度「イヤだ」「駄目だ」を口にすると厄介この上ない問題児に変身するのだ。

殊に自分の事情のせいで、他者に迷惑や被害が及ぶ可能性がある場合、最強の呪文よろしく

飛び出す率が高くなる。それを知っている以上、ラエスリールに口を挟ませずに話を進められるだけ進めておくのは基本対策というものだ。

それにしても、とサティンは意外の念を以てそばに控えているふたりの妖貴をちらりと見やった。

ラエスリールに対するサティンの態度が面白くない——どころか、ひとりははっきりと不快そうだ——と言いたげな顔をしていながら、ふたりともどういうわけか口を挟もうとしないのだ。

先にラスが注意してた……とはとても思えないから、もしかしてチェリクさまがこんな事態を見越して釘を刺しておいてくださったのかしら？

……どうも、その線が強い気がする。だとしたら、このふたりが従っているのは魅了眼のせいだけではないということだ。

魅了眼に限らず魅縛師の術は強制的に魅了し、縛する力を放つのだと聞いた。だからこそ、強い精神力を持つ魔性は、魅縛されても抵抗することも多い、と。

自分にとって不愉快な事態を我慢することを、妖貴ともあろう魔性に受け入れさせるなど、強制では限度がある。

だとしたら、考えられるのは彼らが魅縛した相手——チェリクに従うことを選んだというこ

とだ。

妖貴をふたりも――しかも心から従えるなど、考えるだけで目眩がする。それはどれほどの力であり、どれほどの魅力であることか。

……まあ、王蜜の妖主と夫婦になれるんだから、妖貴ぐらい楽勝かしら。ああ、でも。

もう一度、ふたりに目を向け、サティンは胸中で呟いた。

ものすごーく、眼福なんだけど、こんなとびきりの美観を放置しておくだなんて、あの傍迷惑な魔王はなにを考えているのかしら？

と。

その時だ――ラエスリールの様子に異変が起こったのは。

唐突に……何の前触れもなく唐突に、ぐらりとその体が力を失い、地に崩れ落ちようとしたのだ。

「ラス！」

「姫君！」

「姫君!?」

三つの声は重なり、伸ばされた手が彼女の体に触れたのもほとんど同時のことだった。

完全に力の抜けた体を三人で支えながら、サティンはふたりの妖貴に噛みついた。

「ちょっと、いったいどういうことなの、これは!?」
突然意識を失うなど、ラエスリールの身になにが起こったというのか。
混乱しそうな意識を無理矢理立て直し、彼女は妖貴たちに事情説明を求めた。
が――。
動揺を隠そうともしない――あるいはその余裕さえないのかもしれない――ふたりの様子に、サティンは相手も答えを持っていないことを知った。
恐怖と絶望が、じわりと胸を侵し始める。
喪失の恐怖に慣れることなどできはしない。
「ラス……ラス、返事をして!」
サティンが必死に声をかけた時――その祈りは天に届いたかに見えた。
支えている肉体に、力が戻ったのだ。
「ラス」
安堵の息を洩らしながら、サティンが声をかけた時――妖貴の青年が呟いた。
「違う」
そして、もうひとりが口にした呼びかけは――。
「御方さま」

その声に答えるように、女性がゆっくりと顔を上げた。
変わらぬ美貌、変わらぬ緑の瞳――けれど、そこに浮かぶ光は、サティンが知る妹分のものではなかった。
「驚かせてごめんなさいね」
声も同じはずなのに、ずっと柔らかくまろやかに聞こえる。
ああ、このひとが――。
「あなたがサティンね」
嬉しそうに声を弾ませ、そのひと――チェリクはにこりと微笑んだ。

※

「それで、あのひとは……ラスはどうなったの!? まさかまた意識だけ行方不明になったとかいう話じゃないでしょうね!?」
魅縛師であるリーヴシェランにとって、史上最強と名高いチェリクのことが気にならないわけもなかろうに、話を聞いて真っ先に尋ねたのは偉大な先達のことではなく、安否が気遣われる友人のことだった。

こういうところ、本当に可愛いのよねぇ、彩糸が溺愛するのもわかるわー。

などと到底口にできないことを考えながら――言ったが最後、顔を真っ赤にして激怒するに違いないのだ――サティンは可愛い同志を安心させることにした。

「ああ、それは大丈夫。あの後、ちゃんと戻って来たって、衣於留が知らせてくれたから」

結局、サティンに許された時間内に、ラエスリールの意識が戻ることはなく、それは非常に心残りではあったのだが、きちんと戻ってきたというのなら、また機会はあるはずだ。

リーヴシェランの言うような事態になっていたら、到底こんな風に暢気に邪羅の短気を怒ってなどいられなかった。

「チェリクさまによると、ラスの意識というか魂は、一度肉体から切り離されて、今では全然別の器に繋がれているんですって。その器が時々、ラスの意識がきちんと留まっているかどうか確かめるように彼女の力を引き出そうとする仕掛けになっているらしくって、チェリクさまのなかにずっと宿っているわけにはいかないんですって。でも、本人の体じゃない分、拘束力はそこまで強くないらしくて、チェリクさまはそこにつけ込んだと仰ってたわ」

チェリクから聞いた内容をそのまま繰り返すと、とびきりの美少女はなぜか苦いものでも噛んだような顔になった。

「リーヴィ？」

どうしたの？

尋ねるが、彼女はふるふるとかぶりを振るばかり——それでも辛抱強く答えを待っていると、やがて諦めたように大きく息をついた。

「チェリクさまって、以前ラスが宿っていたあの方でしょう？　意識のない状態しか見てないけど、ちょっと人間離れした美女だったわよね」

確認を取るような問いかけに、サティンは「ええ」とうなずいた。

「あの時もお美しいとは思ったけど、意識が宿った姿はもっと凄かったわよ。『実はわたし妖貴なの』と言われても納得しそうな人外美女だったわ」

サティンの素直な感想に、リーヴシェランはますます顔を奇妙に歪ませた。

「あなたの言葉選びも相当容姿からかけ離れているけど……でも、ちょっとショックだわ。あんなにお美しくて城長まで務めた方の口から『つけ込む』なんて言葉が飛び出すだなんて」

どうやら優先すべきはラスの安否であることに違いはないが、チェリクのこともしっかり気になっていたらしい。

しかも美しい夢を抱いていたようだ。

まあ、夢のように綺麗な方だものねえ……。

ただし、黙っていればという絶対条件がつくけれど。

「……でも、ほら……ラスを産んだひとなんだし」

しょせんという言葉を省略したことに、果たしてリーヴシェランは気づいただろうか。

ややあって、リーヴシェランがため息交じりにうなずいた。

「そうね、あのひとをこの世に送り出したひとが、綺麗なだけのひとであるはずがないわね」

どうやら納得してくれたようだということで、サティンは話題を邪羅に戻すことにした。

増え続ける『お断り物件』に関する協力を申し出てくれた即戦力との繋ぎ役として、邪羅を当てにしていただけに、出入り禁止状態というのは非常に困るのだ。

「それで、話を戻すんだけど、いくらあの子が馬鹿でも、そこまでの馬鹿働く以上、何かきっかけがあったはずでしょう？　二度と同じ轍を踏ませないためにも、そこらへんの情報があるなら教えて欲しいんだけど」

留守にしていた自分には知りようがないことだ――同志の護り手に向けて投げた問いに、虹色の髪の美女は困ったような笑みを浮かべた。

「どうやら、アーゼンターラにこれ以上構うなと、向こう側の保護者から釘を刺されたようです」

途端にリーヴシェランは不機嫌に顔を顰めたが、サティンとしては得心がいった。

「あー、なるほど。わたしたちのやってることって、常識はおろか良識からも外れること多い

ものねえ。こんなのに大事な子供近づけたくないって気持ちはわからないでもないわねー。でも、そんなの邪羅だってわかってるはずでしょう？　あの子は子供ではあるけれど、同時に魔性としての経験積んでるから、かなり達観してると思ってたんだけど？」

そんなことで短気を起こすとは考えられないんだけど……。

続けた言葉に、正解とばかりに彩糸が笑いを噛みしめる。

「まあ、その折に向こうの方が一般常識的な正論を危険な対象に向けて繰り広げられたということらしく――」

婉曲な彩糸の説明はわかるようなわからないような微妙なものだったが、それを補足するリーヴシェランのそれはどこまでも直線的だった。

「ラスをあんな風に過保護に育てたひとたちは間違ってるって言ったんですって。普通に育てれば冤罪騒ぎの時だって、味方はもっといたはずで、つまりはラスも周囲も努力が足りなかったと主張してくれたそうよ」

憤然としてそう告げるリーヴシェランも、以前は同じ側に立っていたはずだが……今では本気で怒っている。

彼女に――ラエスリールに関わるということは、そういうことなのだ。

世間の常識や良識はもちろん大事だろう――だが、それに則していないことでも、間違いで

はないことがあると、いつの間にか悟らされる。

だが、正論は正しいから正論なのだ。そのことを踏まえている分、自分やセスランが同じ台詞を聞かされてもこんな風に反発することはなかったろう——少しだけ、青いほどの若さからは遠ざかってしまった自分を淋しく思った。

それでも、自分が選んだ道を悔やむことはないけれど。

アーゼンターラ——紅蓮姫に新たに選ばれた少女。

過去に魔性に村を灼かれ、家族と知り合いを殺され、たったひとり生き残った弟を魔性に奪われた。そのことに罪悪感を抱き、自分を弟だと思い込み、攫われた姉を救うために浮城で技を学んだ。

それは逃げだ。

けれどそのことをサティンは責める気にはなれない。浮城の住人の誰も、アーゼンターラのその弱さを責めることはできないだろう。その道を選んだとしても仕方ない——そう思えるほどに魔性の力は圧倒的なのだから。

そんなものに晒された十二になるならずの子供が、罪悪感と自責の念に押しつぶされないために、残されているのは逃げることぐらいだ。それを誰が責められるというのか。

三年の時を経て、彼女は本来の自分に立ち戻った。それは誰に言われたからではない、立ち

戻っても耐えられるだけの力を培ったからなのだ。

アーゼンターラは強い。充分に強い。

逃げ道を用意しただけで終わらなかったのがその証拠だ。そして今、逆風吹き荒れる嵐を切り抜けようとしている。

若さゆえの危なかしさは多々あるし、焦りがもたらす危機もきっとあるだろう。

だが、それでも——とサティンは思わずにはいられない。

あの子の抱えていた、恐怖や闇という概念さえ呑み込むような恐ろしい、名前さえつけることのできない何かに比べれば。

父の配下の妬みが原因で無残に妖鬼に母を殺された少女。

その後身を寄せた先で、同族である人間に裏切られ死地に追いやられた少女。

昔は想像もできなかったことが、今になって理解できる。そうなって初めて、自分が本能的に恐れていた何かの正体を知ったように思う。

人間からも魔性からも爪弾きにされ、この世に誰も味方はいないのだという絶望に晒された、当時十二歳だった少女——ラエスリール。

逃げ道は何一つ残されていなかったあの少女は、絶望に押しつぶされそうになった時、一体何を思っただろう？

自分自身を呪わなかっただろうか？
世界に誰も自分を必要とする者がいないと絶望に押しつぶされはしなかっただろうか？
自分など要らないと思いはしなかっただろうか？
……そんな世界に絶望し、そんなものは要らないと……ちらりとでも思いはしなかっただろうか？
最強の魅了眼をその身に宿した身で。
杞憂だとは思う。
出会った彼女は心を閉ざしてはいたが、決して世界を呪ってはいなかった。
それでも、もしかしたらという思いは拭えなかった。
細心の注意を払い、傍目には過保護なまでに甘やかしているとしか見えない図式を構築してまで……そこまでして。
わたしとセスランが本能的に恐れて忌避しようとしていたのが。
「あなたが世界を巻き込んだ心中だった……だなんて」
向かいの席に座っていた少女が「はあ？」と素っ頓狂な声を上げた。
「サティン、あなた何を言ってるの？」
理解不能と顔に大書きした美少女の直截な問いかけに、思わず苦笑したサティンだった。

「ごめんなさい。昔に意識を飛ばしすぎたわ。今となってはあり得ない恐ろしい杞憂を抱えていた時期があったのよ」

その頃のことをつい思い出してしまって――。

告げるとリーヴシェランはあからさまにほっとした様子を見せた。

次いで、思い出したように肩を怒らせた。

「もう！　何があったのかと思ったじゃない！　あんまり心配させないでよ！」

「ごめん、ごめん」

悪かったわ――。

謝るサティンは知らなかった。

自分が杞憂だと片付けたがっている不安が正鵠を射ており、すでにそれが過去実現しかけていたことを。

どれほど盤石に見えようと、完全に盤石な世界などないのだと――。

そうして彼女たちは近い将来、そのことを別の存在によって思い知らされることになる。

# 第二十三章　光糸の柱

# 一

「さあ、できた」

完璧な仕掛けを前にして、紫紺の妖主の影を自認する妖貴――津々螺は艶然と微笑んだ。

実際の街の通りに幻術と亜空間を重ねることで、彼女は望み通りの空間を生み出していた。

美しい、それは蜘蛛の巣に似ている。

四方八方に広がる横糸と縦糸――だがそれらは一点に集約する。

たったひとつの集約点――そしてそれは終着点でもある。

「さあ、これをどう紐解いてくれる？」

くつくつと喉を鳴らしながら、津々螺は己が敷いた罠の図式をうっとりと見つめた。

それは、過去彼女が作り上げた糸細工の中でも最高のものだった。

これを突破できるのであれば、我が至高の主の前に立つことを許そう。

それは津々螺にとって最大の譲歩だった。

だが、この罠に易々と搦め捕られる程度の輩でしかないのなら――。
そんな輩など。
「我が主の前に立つ資格などない」
きっぱりと言い切り、津々螺は罠の仕掛けをかけ終えた。
あとは獲物がかかるのを待つばかり。
「さあ、なにを見せてくれる？」
主が『客人』と呼んだ相手だ。
多少の期待を抱いてもよかろう。
「さあ」
さあ。
お前達は何を見せてくれる？
津々螺の期待に応えるように、張り巡らされた罠の糸がそれぞれに震えた。
そして、その糸の震えが現実の街のありようを震わせ、変えていく。
「いい子だ」
期待通りに変化する街に、津々螺は楽しげに告げた。
街にとっては、彼女のその一言で充分だった。

『良い子だ』

言われた状況を、街は守り続ける。

いつまでも――。

※

マグァーラ帝国第三の都市――カーヴィアは、異常な静けさに包まれていた。

全住民が魔性によって昏睡状態に陥ったことを受け、マグァーラ皇帝シスアーナ一世がカーヴィアを封鎖したためだ。

街に四つある門には、マグァーラの兵士たちが立ち、街中にはほとんど人影というものが見られない。

マグァーラの副主要都市が魔性に襲われた――そんな噂が広がらぬよう、シスアーナ一世は速やかに兵を派遣したのだ。

目的は昏睡状態の住民とその財産を守るためだ。

無防備な街は、侵入者にとって略奪の絶好の的となる。

住民たちの命に関しては、彼らにできることは何もない。意識を奪われたまま、日々影を薄

くしていく十万の民――魔性に対抗する術を持たない為政者にできることは、せめて彼らの肉体の安全と彼らの財産を守ることぐらいだったのだ。

そんな兵士が詰めるカーヴィアにアーゼンターラたち一行が到着したのは、皇帝からの依頼を受けた浮城が彼らを派遣した三日後――異変が生じて九日目のことだった。

静まり返った街に入るなり、「わあ」と力ない声をもらしたのはスラヴィエーラだった。

その静けさは、どこまでも限りなく死に近い気配を纏っていた。

それを識るからこその声に、オルグァンは一瞬目を瞑り、マイダードはただ頭をふり――そうしてアーゼンターラは愕然とした。

こんなにも静かな、死が迫る場所というものを、彼女はこれまで目にしたことがなかったのである。

※

「なに、これ」

アーゼンターラは思わず口にした。

何なのだろう――この静けさ。

この空気。

停滞して流れることを忘れたかのような、単純な『空気』だけが街全体を覆っている。

ここは廃墟ではないのに。

生きるひとのいなくなった、街では決してないはずなのに——なのに、街全体を包む虚ろな空気は何を意味するというのか。

「わたしも、ここまで人間の生を否定する空間に立ち会ったのは初めてだけどね」

スラヴィエーラがまるで凍えたかのように、ぶるりと身を震わせながら呟いた。

「凄いわ、これは……住民はまだ術の完成を待ってる途中で、生きているはずなのに……到底そうは思えない。諦めるしかない、諦めろと言われているとしか思えないわ。これが上級魔性の本気の力だというのなら、わたしたちがこれまで対応してきた事件や事象は、元凶の未熟さや本気の程度が低かったのだとしか言いようがない……！」

それはすなわち、本気で魔性が力を揮えば、人間には——たとえ浮城の人間であろうとも対抗する術はないと、そう言っているに等しい。

「ちょ、スラヴィ！　そんなこと！」

街に入ったばかりで、そんなことを言うなんて——アーゼンターラが声を上げてその先を続けるより早く、もの申したのはオルグァンだった。

「分析するなら、ひとりで無言でやってくれ。こんな初っぱなに士気を挫かれてはたまらん」

軽い言動が目立つマイダードもこの時は同性の破妖剣士に賛同した。

「そうだって。ただでさえ旗色悪いのに、味方がますます悪くしてくれちゃったら救いってもんがないじゃないか。ここはひとつ、状況の悪さも折り込んで、なんとか明るい話題を提供してくれなくちゃ」

茶化した言葉選びだが、言っているのはオルグァンと同じだ。

士気を下げるようなことを言うな――。

それは、下がるに充分な条件が揃っているということにはならないか？　経験が足りない自分にはわからない、某かの信号が彼らには見えており、それはこちらの圧倒的不利を意味しているのだと……そういうことなのだろうか？

だが、怯んではいられない、とアーゼンターラは思った。自分たちの働きに、カーヴィア十万の民の命がかかっている。そして、もしかしたらその先に、弟リメラトーンに繋がる道があるかも知れないのだ。

「ターラ」

気遣うような声をかけてくる蜜里に、アーゼンターラは大丈夫だと伝えるために小さくうなずいて見せた。

「気圧されてる場合じゃないもの」

ここは目的地ではない——そこに辿り着くための入り口にすぎない。

こんなところで臆していては、先に一歩も進めない。

「……だってさ、スラヴィ。一番のお子様に男気溢れる発言を許すとはなにごとよ？　こういう時こそ、浮城でも屈指のオトコマエで知られるあんたが、うっとりするような啖呵を切ってみせるべきでしょうが」

刺青の捕縛師の言葉のすぐあとに、なにかがぶつかる鈍い音が続いた。

「言うに事欠いて、オトコマエとは何よ！　わたしを何だと思ってるの、あんたは！」

拳を震わせながら声を張りあげる破妖剣士の姿は——アーゼンターラの目から見ても充分に男らしかった。

「なにって、竹を割ったような気持ちの良い性格の怪力破妖剣士……って！　二発目を繰り出そうとするなよ、そこで！　おれは質問に答えただけでしょうが！」

二度目の攻撃から頭部を守るため、マイダードが取った行動は、その場から大きく飛び退くことだった。

「だから、誰が怪力だっての！」

「林檎を片手で握りつぶせるようなひとを、普通非力とは言わないだろう!?」

「林檎ぐらいそれなりにいるでしょう！　怪力っていうのは、片手で胡桃の殻を割れちゃうぐらいをいうでしょうが！」

「おれは林檎握りつぶすなんてできないぞ！　旦那は……できそうだけど、ターラ！　ターラちゃんはどう？　林檎握りつぶせる？」

スラヴィエーラの止まらない鉄拳から逃れるためか、マイダードはアーゼンターラに話を振ってきた。

実に傍迷惑なことである——スラヴィエーラの剣幕を考えると、返答に困るのがわかっていないはずもなかろうに……。

アーゼンターラは窮地に立たされた。

正直に答えるなら、「できない」だ。正直、スラヴィエーラの握力がそこまでとは知らなかった。だが、ここで素直に答えた場合、マイダードがどうあとを続けるか……被害をこちらに分散させる気満々の様子なのが気になる。

「え——……と」

即答を控え、どうしたものかと内心焦っていると、オルグァンが助け船を出してくれた。

寡黙な破妖剣士は、ため息まじりに肩を竦めた。

「スラヴィもマイダードもじゃれあうのは大概にしておけ。林檎だろうが胡桃だろうが、要は

破妖刀の柄を砕かない程度の力なら大差ないだろうが」

諭すような口調で告げられた内容には、しかし気になる言葉が混じっていた。

蜜里が「胡桃と林檎じゃ、確かに大差ないわよねえ」と、人外らしい感想を洩らす中、マイダードが恐る恐るといった体で問いかけた。

「……もしかして旦那、氷結漸の柄……じゃないな、斧だから柄？　ぶっ壊しちゃったことあるの？」

答えを聞きたいような聞きたくないような、なんとも微妙な空気が流れる。

オルグァンは一瞬躊躇うように目を逸らしたが、答えるまで追及が止まないと思ったのだろう——ぼそりと呟いた。

「あれは引き継いだばかりの頃で……柄も古くなってたんだ」

ぶぶ、と噴き出す音がふたつ響く。

そして、すぐにスラヴィエーラの勝ち誇ったような声が続いた。

「ほーら、ご覧なさい！　わたしなんて怪力の内に入らないじゃない！」

「比較対象が間違ってるでしょうが、それは！」

「だから！　本当に柄が古くなって朽ちかけていたんだと……」

苦り切った顔のオルグァンを見た瞬間、アーゼンターラは堪えきれず、笑い出した。

「ターラ」
お前までもか——と言わんばかりの目を向けられ、申し訳ないとは思ったが、どうにも笑いが止まらない。
「だって……だって、氷結漸の柄なんて、あんなに太くてしっかりしてるのに……」
「一番強度の高いものにその後すぐ変えたんだ。もともとはもっと細かったし補強も何もされてなかったんだ」
それでも、オルグァンが怪力であることを否定することはできないだろう。
駄目だ、笑ってはいけないと思うほどに笑いの発作は大きくなる。
「ああ、苦しい。助けて」
お腹を押さえながらそう洩らした時のことだ。
それまで恐ろしいまでの静寂が支配していたカーヴィアの街に爆音が響き渡った——！

※

カーヴィアの中心に、巨大な光柱が出現したのは、爆音とほぼ同時のことだった。
建物をいくつも呑み込んで、白い光柱が天までのびている。

それは炎ではない——純粋に光と呼べるもので、だからこそその正体はわからない。
「光の柱……？」
目を灼く強烈な光量は一瞬のことで、今は直視できないほどではない。
それでも眩さに目を細めながら、アーゼンターラは呆然とつぶやいた。
「どういうことなの……？　カーヴィアを襲ったのは紫紺の妖主の配下ではなかったの……？　邪羅は嘘をついたの？」
カーヴィアのことを持ち出した乳白色の髪の青年は、この街の騒ぎには、どこかで紫紺の妖主が関わっていると言っていたのに——。
それとも、邪羅も知らない要素が、今このタイミングで現れただけなのだろうか。
「ターラ」
蜜里の声は緊張していた。
「あまり直視しないで。目を痛めるわ」
薄曇りの空の太陽ぐらいの明るさだが、巨大すぎるせいか、確かに目が疲れる。
だが、それだけを指摘するにしては蜜里の声は硬すぎる。
「どうしたの？」
尋ねた声に、すぐに答えは返らなかった。

「蜜里？」

重ねて問うと、幼い少女の姿をした妖貴は、整いすぎた美貌を苦しげに歪めていた。

「糸よ」

唐突な言葉が別の少女の声で降ってきたのはその時だ。

見上げた先に、スラヴィエーラの護り手である未羽が、蜉蝣に似た羽を広げて宙に浮いていた。

「あれは光じゃない。糸よ。膨大な量の光を絡めてあるけれど、本質は光じゃない」

糸。

それならば、邪羅の言葉は間違っていたわけではないのか。

紫紺の妖主は糸を操る——配下である妖貴も糸に通じる力を持っているだろうから、未羽の言葉が正しければ、自分は道を見失ったわけではない。

ほっとすると同時に、蜜里の態度が気になった。

どうして、そのことを告げるか否かで、彼女はあれほど苦しげだったのか。苦しませるなにが、あの光柱にあったというのか。

蜜里に目を戻すと、彼女は珍しく目を怒らせていた。向ける先は未羽だ。

小さな口元が、確かに「余計なことを」と呟いたのをアーゼンターラは見逃さなかった。

「蜜里？」

「……強大な力よ。あれを織り上げた妖貴は、ラヴィスで下劣な実験をしてたやつなんか足下にも及ばない力を持ってる」

ラヴィスという単語に、アーゼンターラだけでなくほかの三人も眉宇を顰めた。

住民を閉じ込め飢えさせ、同族に手を出すのにどれほどの時間がかかるのか――そんな吐き気を催す実験を楽しげにやっていた妖貴と直接対峙したのはアーゼンターラひとりだったが、その妖貴を倒すために彼女がどれほど満身創痍となったのか、他の三人も知っているのだ。

あれが、足下にも及ばない……？

その妖貴に、最初歯も立たなかった――緋陵姫という存在が出現しなければ、嬲り殺されていたに違いない事実を、アーゼンターラは忘れることなどできない。

心臓が凍りつきそうな衝撃を覚える。

だが――。

そんなことは考えるまでもなく当たり前のことなのだ。

「緋陵姫さん……低俗な輩だって、軽蔑の念を隠しもしてなかったものねえ……」

おまけにほんの一撃で畢羅の片腕を吹き飛ばしたのだ――彼より強い魔性がいることなど、考えるまでもないことだった。

そして今回の騒ぎ――ラヴィスとは比較にならないこの大都市の住民すべてを術にかけたその力。

畢羅と並べて比べられるはずがないのだ。

だが、わかるのはそこまでだ。その先は、進むことでしか知り得ない。

笑ったことで一度はほぐれた緊張が戻ってくるのを感じた。だが、これは先ほどまでのものとは違う。知らず気圧され、萎縮していた体は今は強ばってはいない。

それまで黙っていたマイダードが、つかつかと近づいてくると、身を屈めて蜜里の顔を覗きこんだ。

「つまり、あれはおれたちを歓迎する狼煙代わりってとこかな？　それとも歓迎会の会場はここですよーって教えてくれてるわけ？」

蜜里の緊張の意味を、彼は見抜いているのだろう――声には逸らすことを許さぬ静かな力が宿っていた。

蜜里の顔が、悔しげに歪む。最近の蜜里は感情を表に出すことが多くなった――ただ、せっかくの綺麗な顔なのに、しかめ面が多くなるのはあまりいただけない。

そんなある意味暢気なことを考えていると、諦めたように蜜里が息をついた。

「両方でしょうね。妖気はあの光柱に集中している……よほど巧妙に隠していない限り、先に

繋がる道はあそこ以外には考えられないわ」

あれだけの力の主が本気で隠しているなら、すぐに見つけ出すのはわたしでも無理だし。

「それも仕掛けのひとつかもしれないわね。相手はわたしたちを試すつもりなのかもしれないわ。どちらにせよ、その試験に合格できなきゃ、先には進めないってことでしょう」

未羽の言葉に、蜜里も渋々とうなずく——その可能性にとっくに気づいていたに違いない。

そしてだからこそ、彼女は言いたがらなかったのだ。

「心配かけて、ごめんね、蜜里」

本当に心から謝りながら、アーゼンターラは「でも」と言を継いだ。

「行かなきゃ何も始まらないの」

「そうだね」

と同意を示したのはスラヴィエーラだった。

オトコマエな性格と評された女破妖剣士は、はっきりと言いきった。

「罠だろうが何だろうが、行かなきゃ始まらないなら行くしかないだろうね。昔から『虎穴に入らずんば虎児を得ず』って言うし。十万人の命って虎の子だ……取り戻すよ！」

「無論だ」

こくりとうなずくオルグァンの両目にも、固い決意が浮かんでいる。

「どっちにしろ、街に入った以上おれたちのことをあっちが見逃してくれるわけなかったんだし、下手に無視してへそ曲げられたらもっと厄介なことになりそうだもんなー」

行くしかないでしょ。

肩をすくめながらマイダードが同意する。

護り手たちの誰も、止める言葉は口にしなかった。

四人は光柱を目指し、一歩足を踏み出した――。

※

くすくすと女が笑う。

愉快そうに、楽しげに。

白磁の肌を震わせながら、漆黒の睫に縁取られた黒瞳を煌めかせて、女――津々螺は嬉しげに一言呟いた。

「さあ――お手並み拝見といきましょう」

## 2

巨大な光柱を目指して足早に進んでいた四人は、ほどなくして異常に気づいた。

光柱を目指して真っ直ぐに進んでいるはずだというのに、なぜか一定の距離を直進すると、光柱の位置がいつのまにかずれているのだ。

方向を間違ったはずがない。これ見よがしに天に突き刺さる光柱は、何よりの目印になる。それを目指しているのに、迷うはずがないのだ。

しかし、確かにずれる方角――油断すれば、全く別の方向に出てしまうことさえあった。

「どう考えてもおかしいわ。カーヴィアの地図は頭にたたき込んでるのよ、この公園から東が街の中心部で、実際そうとしか見えないのに……どうして南部に辿り着くの！　こんなの考えられない！」

方向感覚に優れ、地図の理解力も高いスラヴィエーラは、これまでも依頼地の案内役を務めてきた。

彼女に任せて目的地に辿り着けなかったことはないのだ。
ところが、今回に限ってはそれが当てはまらない。彼女の指示に従って進んでも、一向に光柱に近づけないのだ。
何か——彼女の裏をかく仕掛けが施されているとしか思えない。
「スラヴィが要だと知って、彼女の感覚に相手が干渉してきているのかしら？　だけど、スラヴィほどじゃなくても、わたしだって方向音痴ってわけじゃないのに……」
どうして、道をずれてしまうのだろう。
もう何度目かわからない「外れ」の結果に、焦るまいと思っていても、じりじりする思いは強くなっていく。
これに同意する声が刺青の捕縛師から上がる。
「おれも旦那も器用に迷子になる特技はないよ。これはもう、全員の感覚に干渉されていると考えるべきだろうね」
はっきりわかりやすい目印立ててくれたくせに、意地が悪いよなぁ。
わしゃわしゃと髪をかき乱しながらマイダードは天を仰いだ。
「蜜里の話をもっと深く考える必要があったかもな」
立ち止まり、そう言い出した青年に、スラヴィエーラが噛みつこうとするのを、すんでのと

ころで止めたのはオルグァンだった。

「やめておけ。マイダードの言うことにも一理ある。このまま視覚に頼るだけではいつまでも辿り着けないのは明らかだ。疲労しきったところを襲われたらどうする」

一度立ち止まって考えるべきだ。

あまりにも正論であるために、スラヴィエーラは反論できない——いや、相手がマイダードであったなら、それが正論でも素直にはうなずかなかったかもしれないが。

「だけど……感覚は確かにこっちだって伝えてくるんだよ。なのに、実際にはずれまくっていて……もう、ほんとに何が起こってるんだか」

スラヴィエーラが悔しそうに唇を噛みしめながら訴える。

これまで、こんな風に感覚を惑わす——そこまでの力がある——魔性を相手取ったことがないだけに、余計に戸惑っているらしい。

「左谷芭、未羽、どういうことかわかるか？」

オルグァンの冷静な問いかけに、呼ばれて初めて姿を現した彼の護り手は頭を振った。

それに同意するように言葉を連ねたのは未羽だった。

「わかりっこないわ。こんな力の強い……おっかない気配感じたが最後回れ右っていうのがわたしたちの常識だったんだもの。たとえ意図したことじゃなくても、漆黒の御方たちの邪魔な

んかしちゃったら一瞬でぺしゃんこよ。生き残る上での賢い智恵は得たけど、これは明らかに範疇外よ。なにがなんだかわからないのはわたしたちも同じよ」

広い意味で眷属とはいっても、妖鬼と妖貴の実力には彼我の差があり、我が身を守るために定めたルールというものが妖鬼である未羽たちにはあるらしい。

それを意外に思い、アーゼンターラは思わず呟いていた。

「そんな……同じ魔性なのに……」

これに、未羽は人間くさい表情――苦笑というやつだ――で答えた。

「魔性という括りはそうね、人間が言うなら母体から生まれて乳を飲んで育つ種族全体ぐらいの意味しかないの。いえ、実力至上主義が本能に刻まれてる分、もっと大きいかもしれないわ。醜く知恵も持たない小鬼なんて、漆黒の方々からして見れば虫けら以下なんじゃないかしら？　妖鬼も程度問題で犬猫ぐらいに思ってると見て良いわ。それなりに情を感じれば庇いもするし巻き添えにしない程度の配慮はする、けれど明らかに自分の邪魔になるようなら気にかける必要性を覚えない……って、とこ？」

妖鬼である自身を卑下するかのような発言をした未羽に、スラヴィエーラが咎めるような目を向ける。

だが、彼女が何か言うより先に、未羽は「別にわたしたちは自分を卑下なんかしてないわ、

それは誤解しないでね」と告げた。

「だけど、未羽――」

「あー、スラヴィはオトコマエに見えて、実は涙もろかったりするから敢えてこの手の話題は避けてきたっていうのに……」

ふわふわと宙に舞う柔らかい髪をかき上げながら、蜉蝣に似た羽を持つ妖鬼の少女は大きなため息を洩らした。

「あのね、卑下するとか漆黒の方々を崇拝するとかって問題じゃないの。わたしたちは力と美しさに無条件に価値を置いてしまうの。もう本能なのよ。そうした見地から言うとね、あの方々とわたしたちでは人間と犬猫どころではない力の差異があるの。心の強さまで含めた、ね。浮城の護り手になるときに、徹底的に矯正教育受けたわたしでも、まだそう思ってるのよ。魅縛師に出会う以前のわたしにとって、漆黒の方々なんて雲の上の存在そのものだったわよ。かの方々の邪魔になるなんてとんでもない、あの方々を自分ごとき存在のせいで不快にさせるだなんてとんでもない、その手にかけていただけたら光栄至極というものだけど、そんな手間をかけさせるのも恐れ多い……なーんて思ってたりしたわよ」

初めて聞かされた話に、スラヴィエーラは言葉をなくしたようだった。

そんな相棒を困ったように見やったあと、未羽は「だからね」と本題に入った。

「何しろそういうわけなものだから、こういう時に答える言葉がないわけよ。ごめんね、スラヴィ。こんな絶体絶命に到りかねない状況で役に立てなくて……まあ、でもここまでわたしがあっけらかんと言えるのも、頼りになりそうな藁がしっかりいるからなんだけどね」

にっこり笑った妖鬼が真っ直ぐに見つめたのは蜜里だった。

漆黒黒瞳の上級魔性――妖貴。

「というわけで、経験不足な年少者に頼るようで心苦しいけど、頑張って考えて答えてちょうだいな、蜜里。さっきから生じつづけている視覚と感覚のずれって、どういうことなのかしら？　可能性に関しては、わたしもいくつか考えはしたんだけど、どれも裏付けできる事象の蓄えがないのよ」

蜜里は。

明らかに無理難題を押しつけられた体の蜜里は。

しかし、そこで「わかるわけがない」とは言わなかった。

言えなかったと言い換えるべきか……生まれてまだ十余年。経験不足だなんて言葉でも追いつかないほど経験不足な彼女であったが、未羽の捨て身の――恐らくは決して人間に語るつもりはなかったであろう事情を暴露してでも護るべき相手を護ろうとする意志を見せられては、そんなことを逃げ道にするわけにはいかなかったのかもしれない。

蜜里は考えこむように、思い切り眉間に皺を寄せた。
そして――。
難しい顔をしたまま、今現在可能な限り、皆にとって誠実な答えを口にした。
「……視覚への干渉、だと思う」
と。
「視覚？」
「じゃあ、今目に見えてる景色は当てにならないってことか？」
マイダードの問いに、「一部は」と唸るように答える。
「一部ということは、完全に視覚を乱されてるわけではないと？」
スラヴィエーラの問いには「だからこそ、効果的なんでしょう」と言い、きつい眼差しで周囲を見直した。
そうして彼女は頷いた。
「やっぱり、そうだわ。最初に光柱が出現した瞬間に、何らかの干渉を受けたのは間違いない……そのせいで、わたしたちは視覚を最優先するように誘導されたんだと思うわ」
光の屈折で、視覚を惑わすことなんて簡単なことなのに、今の今まで誰も視覚に囚われすぎていることに気づかなかったのが、なによりの証拠だわ。

蜜里は憤然と続けた。
「本当はスラヴィエーラの感覚は正しかったんだわ。だのに、視覚に惑わされて、わたしたちはどんどん目的地から遠ざけられてきたのよ！　信じられない！　わたしが……こんな下らない、初歩的な手口に引っかけられるだなんて！」
叫ぶ蜜里の全身から、不可視の力が放たれる！
まんまとしてやられたという、そのことに憤る蜜里の力は、純粋に自分を謀った存在そのものに向けられる。
がしゃん！
玻璃が大量に、しかも盛大に砕かれるにも似た音が周囲に響き渡る！
そうして後に残ったのは――。
街の中心からは随分離れた場所に誘導された四人の浮城の住人とその護り手たち。
そして、先ほどまでと違い、輝きに精彩を欠いたように見える光柱の姿があった。

※

「まあまあ、お見事」

小さな同胞が見せた力に、津々螺は本気で感心し、手を打ち合わせた。

誰も彼もが最初に仕掛けた罠に翻弄され、なかなか突破してくれないことに辟易していた彼女にとって、それを破ったのが誰であれ、罠を第二段階に進められることのほうが重要で喜ばしいことだった。

罠に掛けられた当人たちにとっては冗談ではなかったろうが、それは彼女にしても同じことだった。

「まったく……このまま先に進んでくれないなら、逆にどうしたものかと思ったわ」

客人たちを試すための仕掛けはまだたっぷりと用意してあるというのに、最初の仕掛けで終わられては仕掛けた甲斐もないというものだ。

けれど、これなら第二の仕掛けに移行できる。

「踏みつぶすにしても、相応の価値を見せてもらわないことには、そうする気も起こらないのだもの」

高慢で傲慢な願いを、当たり前のものとして津々螺は一方的に見つめる鏡の向こうにいる一行――アーゼンターラたちに求めるのだ。

「今度は人間たち、お前たちがわたしの期待通りの者かどうかを示すのよ？　……示して、おくれよね？　そうでなければ、わたしはお前たちを千々に引き裂いてしまうよ」

※

「うわぁっ！」
突然上がった悲鳴に、アーゼンターラははっと息を呑んだ。
悲鳴は男性のものだった。
「妖鬼が、どうしてこんなところに!?」
別の声が悲鳴の理由を教えた。
「おい、あいつら、住民を狙ってるんじゃないのか!?　建物に入ろうと……！」
「そんな！　みんな逃げられないんだぞ！　止めろ！」
緊迫した声が飛び交い、カーヴィアに起こった異変の内容を伝えてくる。
突然現れた妖鬼が、意識のない住民たちを襲おうとしているのだ。怒声や悲鳴は街を護る警備兵のものに違いない。
その声に宿る恐怖は隠しようがない――それでも「止めろ！」と叫ばずにいられない心境は察するに余りある。
目の前で同じ国の民が、為す術もなく魔性に殺されるなど、誰が見逃せるものか。国民を護

るという意識の高い兵士なら尚更である。
それでも――。
破妖刀も封魔具も持たない彼らに、妖鬼に対抗する力はない。
「行くよ！」
アーゼンターラたちの中で最初に決断したのはスラヴィエーラだった。
「本職がいるのに、畑違いの素人さんに押しつけるわけにはいかないじゃないか」
もっともだった。
こくりとうなずくオルグァン、マイダードは「あからさまに罠っぽいねえ」と皮肉げに言ってはいるが、その目は悲鳴が聞こえた方向に向けられたまま動かない。
そうだ、これが新たに仕掛けられた罠である可能性は高い。
いや、むしろ確実に罠だろう。
蜜里が力を放って光柱による意識干渉を破ってまだ間もないのだ。
それでも――。
「罠でも何でも行かなきゃ助けられない！　警備のひとたちだって無事にすむはず――」
ない――そう続けようとしたアーゼンターラの頭に、オルグァンが手を置いた。
その足はすでに動き出している。

「わかってる」
「まあ、罠だってんなら突破するしかないよねぇ。ちょっと骨折れそうだけど、最初から楽な仕事だなんて思ってなかったんだから今さらか」
「楽にできる仕事なんかあるか！　あんたはすーぐ怠けようとするそのクセをどうにかしないと人望を失うよ」
きついことを笑いながら青年に告げるのはスラヴィエーラだ。
「だーかーらー、今回は全然怠けてないでしょ！　勝手にひとの評判を下げないでほしいな。ということで、ほらターラちゃん、走るぞ」
軽く背中を押されたら、勝手に足が動き出した。
「少しは成長してくれたかな？」
隣でマイダードが笑いながら言った。
何を言われているのかわからない彼女に、答えたのはスラヴィエーラだった。
「以前なら、わたしらのことなんて置いてきぼりで突っ走ってっただろう？　ちゃんと一緒に行く気になってくれたのは進歩だっていうこと！」
確かに――。
ガエリスでもラヴィスでも、目指す敵を感知するなり後ろも見ずに走り出した――チームを

組んでいるスラヴィエーラたちはまさしく置いてきぼりだ。
そんなつもりではなかったのだけれど——彼らなら、自分がいなくなってもやってくれる。任せて大丈夫だと……そう思っていた。
だが——。
やってくれるとか、任せて大丈夫だなんて、わたしはなんて尊大なことを考えてたんだろう……経験も力も足りないわたしこそが、一番の未熟者だったのに。
紅蓮姫を与えられたことで、自分ではそのつもりはなくとも思い上がっていたのだろう。
何とも情けない話だ。自分で自分が恥ずかしくなる。
けれど——と彼女は思った。
恥ずかしいまでに未熟な過去は変えられなくても、これから自分を変えていくことはできるはずだ。
弟に恥ずかしくない生き方をしようと、緋陵姫の伝言を聞いて思った。
リメラトーンだけではない。恥じない生き方——過去については修正不可能だが——というものは、きっと誰か特定のひとりに対するものではなく、親しい大切なひとたち全員に対するものなのだ。
自分はこれから、一歩ずつそれを積み上げていかなければならない。

……そう、と思えるまでは道は遠く険しそうだが、千里の道も一歩から、だ。
アーゼンターラは走りながらそんなことを考えていた……。

※

「うわ、一体じゃないのかよ!?　大丈夫か!?」
辿り着いた騒ぎの場所には、少なからぬ血臭が漂っていた。
マイダードはそばに倒れている警備兵に近づくと、大きく裂かれた腕の止血をしながらこれまでの事情を聞き出していく。
倒れている人影はほかにもあった。
アーゼンターラも足をざっくりと傷つけられた兵士に向かおうとした。
だが、それは当の兵士によって止められた。
「おれたちはいい！　致命傷じゃないのはわかってる！　おれたちはいいから、一刻も早くやつらを追ってくれ！　やつら、怪我したおれたちに見向きもしないで建物に入って行ったんだ……狙いは意識のない住民なんだ！」
それは一目でわかったことだった。

魔性の中でも下位に位置する小鬼や妖鬼は、人間の血臭に酔うことが多い。もっともっと血を求めずにいられなくなるのだ。

よほどのことがなければ、動けない傷を負った警備兵が無事ですむはずがない。つまり、彼ら——やつらと言う以上、襲ってきた魔性は複数だ——には血臭の誘惑を振り切るだけの目的があったのだ。

影糸術によって意識と影を奪われた人間は、当然のことながら抵抗することはできない。強い魔性に狙われた彼らは、下位魔性にとっては魅力的な獲物となるのだろうか。

「しかし解せないな」

ぼそりと洩らしたのはオルグァンだった。

「左谷芭。お前なら、桁違いの実力の魔性が徴をつけた人間を獲物に選べるか？」

自らの護り手に問いかけた破妖剣士は、しかし言葉の選び方を少しばかり間違った。

左谷芭は——収穫寸前の麦穂を思わせる明るい髪の隙間から、芭蕉の葉を生やしたようにしか見えない異形を持つ護り手は、不本意そうに表情を曇らせた。

「なぜ、現在形で尋ねるのか、その真意を逆に尋ねたい」

これにオルグァンは素直に謝意を示した——彼もこの事態に冷静ではいられないという証明かもしれない。

「悪い。かつてのお前なら選んだか、と尋ねるべきだった」

だが、左谷芭の表情は硬いままだった。

「オルグァン。お前はもっと言葉というものに気を遣うべきだ。失言を恐れて寡黙であるより、言葉を用いることでその使い方を訓練するほうが前向きだとわたしは考える」

固い口調でそう告げた左谷芭は、言い込められた格好のオルグァンが口を噤んだことにため息を洩らすに留めた。

「……今の切迫した状況下で、これ以上お前の問題点に拘るのは得策ではないと考えるから答えるが……否だ。漆黒の方々はもちろんのこと、自分より上位の者が残した徴を持つ者に手を出すなど自殺行為だ。ここを襲った者たちは、許されたか命じられた行為だからこそ、この暴挙としか思えない行動に踏み切ったのだと思われる」

堅苦しすぎる物言いは、聞いているだけで体のあちこちが固まってしまいそうな窮屈感を放っている。

もしかしたら、オルグァンが滅多に護り手に声をかけないのは、このせいかもしれない――と、アーゼンターラは思った。

後に聞いたところ、それはあながち間違いではなかったらしいが。

だが、その言葉の意味するところは――。

「罠確定ね」

そうだと思ってたけどね——とは、スラヴィエーラの言である。

「罠でも飛び込んで突破するしかないってことは変わらないとしても……んー、複数犯ってのが意外だったな。ちょっと向こうの意地悪さを呪いたいかも」

刺青の青年は努めて軽い口調で言ったらしいが、彼の場合口より目がその本気を計るのに向くと気づいてしまえばわかりやすい。

彼の目は、乱暴に破壊された複数の——正確に言うなら四つの建物の扉に向けられていたのだから。

その意味するところは明らかだった。

最低四体以上の妖鬼が、警備兵を傷つけた上で、意識を失い逃げることもできない住民が眠る住居に侵入したということだ。

浮城から派遣されたのも、四人。

向こうの目的が彼らの分断にあることは疑いようがない。

だが、それでも——そうとわかっていても、アーゼンターラたちには他に途は残されていなかった。

先陣を切ったのは、意外にも刺青の捕縛師だった。

「おれ、右端の家行くね！」
宣言した時には、すでにマイダードは駆け出していた。
「じゃあ、おれは一番左の家に行こう」
その場から距離のあるふたつの家を彼らが先んじて選んでくれた意図は測るまでもない。
「「じゃあ」」
スラヴィエーラとアーゼンターラの声が重なる。
「ターラ、悪いけどわたし、右と左じゃ右が好きなの。悪いけど、だから右の家もらうわね」
すっと手を挙げて言いきると、二件残された内、距離のある家のほうへスラヴィエーラはさっさと駆け出した。
残されたのは、一番近い家だ。
アーゼンターラは全力で飛び込んだ。
それは距離が一番近いだけでなく、建物として一番小振りなものだった。
未熟な自分のために、皆がこの家を残してくれたのは明らかだった。
単に未熟なだけであるなら、一軒だとて任せてはくれなかっただろうから、アーゼンターラは未だ扱いに手こずる、しかし強力無比な破妖刀に感謝した。
しかし、問題はまだある。

「紅蓮姫！」

問題の家に破壊された扉から飛び込みながら、アーゼンターラは口が異常に肥えてしまった破妖刀に呼びかけた。

「わたしは！　比較対象があってこそ、ご馳走の価値は上がると思うの！　たまに不味いものを食べるから、美味しいものに出会えた時の感動はより大きくなると思うのよ！」

だから——最後にはとびきりのご馳走が待っているのは確実なんだから。

「これからちょーっと不味いかもしれないものでも、我慢して食べてごらんなさい！」

というか、無理矢理にでも食べさせるけど。

そんなことを思った時のことだった。

正確に言うなら、アーゼンターラがその家に飛び込み、扉の内側に足を着けた瞬間——。

空間がぐにゃり、と歪んだ。

## 3

先日のことがあり、緊急性のない呼び出しは控えてくれるように頼んでおいたにも拘わらず、リーヴシェランから名を呼ばれたのを感じた瞬間、イヤな予感がしたのは正しかった。

浮城の護り手たちの機嫌を――大目に見てもらえる範疇外の暴挙だった自覚はさすがにある――大きく損ねたこともあり、リーヴシェランを訪ねるのにはかなり苦労させられたが、そうやってやっとの思いで辿り着いた彼女の部屋では、にこやかに怒れる鬼がふたり揃って待っていたのである。

「馬鹿ねえ。事情を知らないひとに、知らせなかったわたしたちが何をどう言われたところで怒る権利なんてあるわけないでしょ？　まあ、怒りに任せて殴りかからなかったのはいいとして、代わりに浮城に八つ当たりしてどうするの。沈んだりしたら、あなたに責任が取れるの？」

危うく帰る場所がなくなるところだったわ。

赤くなった掌に、ふうぅ、と息を吹きかけながら言ったのは砂色の髪の捕縛師だった。

因みに彼女の平手が見舞われたのは邪羅の両頬である。

「まったくです。修行が足りませんよ、邪羅くん。願ったり叶ったりの助っ人が見つかったので、連絡係をお願いするつもりでしたのに、気軽に呼び出せないようだと困るじゃありませんか」

暴力は振るわないものの、瞳に剣呑な光をたたえ、なにげに酷いことを言ってくれるのはブロンズの髪の万年青年捕縛師だ。

呼び出した当人はと言えば、こちらを助けるつもりは皆無らしく、「もっと言ってやって」とふたりに頼んでいる始末——苦労して駆けつけた自分の苦労は……と、思わず泣きたくなってしまった。

しかし、泣いたところで事態が変わるわけでもないことはよーくわかっている。リーヴシェランはやり方によっては態度の軟化も可能だが、怒れる捕縛師ふたりは到底邪羅の手に負える相手ではないのだ。

「……悪かったと思ってるよ。あいつの言ったことは正論だったし、目くじら立てるべきじゃなかった。反省してる」

確かにラエスリールやその周囲の事情に詳しくない人間が、与えられた情報のみで判断しよ

うとすれば、良識的な人間ほど、ああいう風に考えるだろう――とは、頭が冷めてから気づいたことだ。

しかし、サティンもセスランも、反省の意思を見せただけでは許してくれないようだ。

「あらあら。以前の邪羅なら『だって姉ちゃんのこと、あんな風に言うなんて許せるかよ！』って突っかかってくるところよね。確かに少しは成長してるのねー、年月って偉大だわ」

感心したように――しかし笑っていない目が怖い――サティンが言うのに、セスランがこう続けた。

「刮目してもその成長が微々たるところが少し物足りませんが、まあまったく成長しないよりはましというものでしょうか」

ひどい。

ここまで辛辣なセスランは初めてかもしれない。

これ以上放っておいたら、自分の心はふたりの言葉の刃物で滅多刺しにされかねない――邪羅は早々に白旗をあげた。

「本当に悪うございました！　これからはこんなことにならないよう気をつけるから、勘弁してよ」

傍目に情けなく見えようとも、このふたりの怒りを鎮めることが先決だ。

静かに深く怒れる捕縛師たちは、決して敵に回すべきではない。

幸いなことに、ふたりもこれ以上邪羅を絞るつもりはなかったらしい——「そうね」と軽くうなずいて、サティンがテーブルの上を指さした。

空になった茶器が並ぶテーブルの上に、書類が入りそうな大きく分厚い封筒がどん、と存在感を放っていた。

「……一応、訊いていいかな。それ、なに？」

答えたのはセスランだった。

「いわゆるところの『お断り物件』の調査資料ですよ。主に依頼人からの聞き取り調査書類ですから、情報が欠けていることも多々あるとは思いますが」

その内容に、邪羅は思わず目を瞠った。

「資料って……いったいどうやって？」

件の情報を集めるために、サティンやセスランが苦労しているのは知っていた。

浮城が断った依頼を勝手に引き受けるのが重大な規則違反である以上、おおっぴらに動くわけにも事務方の面子に探りを入れるわけにもいかず、慎重に情報を拾い集めるにも限界があり、時々疲れた様子を見せていたことを邪羅は知っていた。

見かねて協力を申し出たこともあったのだが、それはきっぱり拒絶された。万が一事が公に

なった場合、部外者の関与は浮城に深刻なダメージを与えるからというのが理由だった。
その、恐らく喉から手が出るほど欲しかったに違いない調査資料が、なぜここにあるというのか……それが問題だ。
「まさか……」
ついに保管室に忍び込み、こっそり失敬してきたのでは――。
感情が顔に出やすいのは邪羅の長所であると同時に短所でもある。
短所の部分が大きいと、次の瞬間彼は思い知らされた。
「やだぁ、なーにを想像してるのかなぁ、邪羅くんはぁ？」
人間の姿であったなら、真っ赤な手形が残っていたに違いない頬の片方の肉を、力いっぱい引っ張ったのは捕縛にあたり弓を使うサティンだった。
矢を番えて引き絞る右手の力は半端ではない。
抓りまで入っているから尚更だ。
「い、いひゃいんれすへひょ……」
「失礼なことを考えた罰があたったんですよ」
本気で痛がっている邪羅に対して、明るく言うことではない。
だが、セスランは抗議に満ちた邪羅の眼差しを綺麗に無視して断言した。

「事務の方々もよほどお疲れなんでしょうね。……魔性被害は増える一方、断らざるを得ない案件もそれに伴い増加の一途を辿ってます。最終的に依頼を受けるかどうかを決めるのは上層部ですが、実際に依頼人から聞き取り調査をするのは彼らですから。心労も大きいと思いますよ……それが、もう何年も続いてますからねえ。心身ともに疲れきった方も多いのでしょう。そうでなければ、数年は保管義務のある書類が、誤ってゴミ箱に捨てられているなんて事態が生じるはずがありません」

えーっと、と邪羅は考えた。

それはつまり、この分厚い書類全部、ゴミ箱に捨てられていたということだろうか。

一通や二通なら、セスランの言葉を信じることもできるだろうが、封筒の厚味から察するに、中の書類はそんな量ではない。

「それって……」

先を続けようとした邪羅だが、なぜか嬉しそうなサティンが口を挟んできた——脅威の右手は放してくれたものの、凶悪な笑顔はそのままだ。

「ほんっと、あのひとたち、疲労が極限にあるんでしょうね。最近、食堂に行くと、彼らがいることが多いんだけど、もう愚痴が凄いというか、みんなで盛大に愚痴大会やってるとしか思えないのよね。守秘義務ってなに？　って訊きたくなるぐらいに、それはもう……」

呆れたように説明してくるサティンの瞳は、なぜか何となく嬉しそうな光をたたえている。

邪羅は確信した。

この書類の山、そして食堂で繰り広げられているという愚痴大会の体をなした情報の漏洩――その意味するところは明白ではないか。

「つまり、事務の連中がなぜだかは知らないけど、セスランやサティンがこっそりやってきたことに気づいて、でも、上には報告しなくて、協力してきたってことじゃないの、それ？」

疑問の形を取った確認に、しかし返ってきたのは明らかな否定だった。

「馬鹿ねえ！」

心底からそう思っているとしか感じられないサティンの声に、邪羅は少なからずを通り越して大いに凹まされた。

「良識と見識の高さを適性として重視される事務室に配属されたひとたちが、いくら疲れてるからって、そんな暴挙に走るはずがないじゃない！」

そんな暴挙のさらに一歩も二歩も先を突っ走っている人間の言うことではないと思ったが、部屋の空気は明らかに邪羅に不利だった。

セスランはともかく、かろうじて味方になってくれそうだと思っていたリーヴシェランまでもが「馬鹿？」と目線で訴えかけてくるのだ。彩糸はこの話題に関しては距離を保つつもりら

しく、先ほどから奥に引っ込んで姿すら見せない。

「そうですとも。守秘義務を破って情報を漏洩するだなんて真似、あの真面目なひとたちができるわけがありません」

だから、これはあくまで彼らのミスなのだ——と言うつもりなのだろう、セスランの声には反論を許さぬ迫力があった。

しかし——それはどう考えてもおかしいのだ。

「いや、だってさ。これまでそんなミスなんか、犯したことないひとたちなんだろう？　だったら順当に考えればさぁ、やっぱり……」

「あり得ないわね」

ついにはリーヴシェランにまで一刀両断されてしまった。

「あのひとたちは、浮城の機密事項に繋がる情報を最初に処理する役目を負っているのよ。そんなひとたちが、意図的に自分の仕事を裏切るだなんて、そんな真似をするはずがないのよ。……まあ、それでも人間だから、心身の疲労に耐えかねて、いつもなら決してしないだろうミスを犯すことまでは否定できないけれど……。だから、邪羅、あなたの言っていることは荒唐無稽もいいところなの」

と——。

そこまで言われて、初めて邪羅は気がついた。

邪羅が感じたことを、この三人が気づかぬはずもなかったということに――そして、浮城の組織とは直接関係のない邪羅には何でもないことに思えることが、彼らにとっては何でもなくはない可能性があることに。

たとえそれが好意から発したものであろうとも、事務室の面々が上層部の決定に反するような行動に走ることは、決して許されず、また認めてはいけない事情があるのだろう。

そこを冒しても、サティンやセスランのやり方に対して賛同の意を示した彼らに、セスランたちはその事実をなかったこととする――そうして、あくまで彼らのミスに自分たちがつけ込んだという立場を取ることで、彼らと浮城を護ろうとしているのだ。

身内である邪羅に対してさえ、その態度を貫くということは、万が一にもこのことが外部に漏れ、世間に知れた場合には、全ての泥を自分達が被るつもりでいることを示している。

セスランやサティンはおろか、リーヴシェランまでその覚悟を決めており、彼らはそれを邪羅にも呑み込めと言っているのだ。

うわ……こいつら。

なに格好つけてんだ、とか負け惜しみ全開の感想さえ抱くに抱けない。言いたいのはやまやまだが、それを言ってしまったら負けを認めるようなものだ。

だとしたら、明かされた事情に関しては「みんな疲れて馬鹿なミスやったんだな」ととぼけるしかないではないか。

その際に、親しい面子が浮城の上層部によって罪を問われたりした場合は、連れて逃げるなりなんなり、その時考えればいいことだ。

や、まあ……大人ふたりは捕まる前にちゃっちゃと安全圏に逃げ出せそうだけどな。

と思ったのは、場の空気も考えて胸にこっそり収めたわけだが。

「……なんか、人間って、不必要に面倒くさくねえ？　おれも自分の正体知らずに母ちゃん捜そうともせずに人間として暮らしてくこと選んでたら、こんな面倒なことあれこれ考えるようになってたのかな？」

それに対する答えはなかった。

心底知りたいことではなかったから、邪羅は自分に望まれていることを果たすことにした。

「それで、おれはその封筒をどこの誰に持って行けばいいんだ？」

※

たら、たら、たらり――。

冷や汗が首筋と言わず、背筋と言わず――全身から吹きだし流れ落ちる感触を、邪羅は生まれて初めて体験していた。

脳裏では、こんな事態に追いやってくれた砂色の髪の捕縛師やらブロンズの髪の万年青年やら愛しく思う魅縛師の少女にすら罵倒の限りを尽くして呪いの言葉を吐き出したい気分だったが、いかんせんそれもできないほどに、目の前の存在は圧倒的力を放っていた。

「移動するそうですから、目印をもらってきました。同じものをあの方も持ってらっしゃるそうなので、たどればすぐにわかりますよ」

にこにこにっこり――曲者捕縛師に、「はい」と手渡された目印は、春の陽光を浴びて綻ぶ小さな白い花のポプリだった。

微かに甘い香りを放つ素朴なそれに、油断した。

思い返せばわかりそうなものだったのだ。分厚い封筒に詰められていたのは浮城における未処理物件で、その厚さを考えればそれが一件や二件や三件のはずもなかったのだ。

そんな件数の未処理物件を、あのサティンやセスランが「任せれば大丈夫」と判断するような人材だ……そもそも普通の相手であるはずがない。

なのに、自分ときたら素朴なカミツレのポプリに油断して、深く考えずもせずに届け物を届けるだけのつもりで気配の主を探って跳んで。

そしたら——そうしたら、だ。

跳んだ先にはこれまで出会ったこともない、恐ろしい魅了眼の主が待っていたのだ。

え、と思った時にはもう遅かった。

明るい緑の——似たものには以前出会ったことがあったが、威力は桁違いだ——眼差しが、心身全てを見通すように投げかけられてきた。

はっきり言って、怖いの一言に尽きた。

これって、魅了眼？　魅了眼だよな？

その正体については、かろうじて……過去の経験があるだけに想像がついたが、知っているそれとは別種類としか思えぬ代物に、肌が粟立つのを禁じ得なかった。

魅了するというより、全身を切り裂き暴かれ、その後に支配される——そんな恐ろしい力に実際に晒された時間がどれほどであったのか、邪羅にはわからない。

解放の瞬間は唐突に訪れた。

容赦なく暴く力が消えたと思った瞬間、目の前に見覚えがあるようなないような、黒髪碧眼の美女がにこりと笑っていたのだ。

「セスランからの書類を持って来てくれたのね。ありがとう」

寸前まで覚えていた恐怖や不安を払拭するに充分な威力に満ちた魅力的な笑顔に、邪羅は内

心脱力しながら「いいえ」と答えた。
封筒の受け渡しを終え、ようやくひとりになった時、彼は大袈裟でなく全身から力が脱けるような錯覚に襲われた。
誰に何を言われずとも、彼は真実を感じ取っていた。
「あれが、姉ちゃんの母ちゃん……」
とんでもないというべきか、それともやはりと言うべきか。
いや、それでも驚きは大きすぎて、とてもあれが現実だとは信じがたい。
「人間、なんだよな」
確認を取るべき相手もいないというのに、彼は問わずにはいられなかった。
「人間、なのに」
嘘だろう――。
ぞっとしながら、邪羅は呟いた。
「母ちゃんと同じくらい綺麗でおっかない人間がいるとは思わなかった――！」
視線だけで解剖されるかと思った――という素直な感想に、サティンとセスランが爆笑したというのは後日の話である。

# 第二十四章　明かされるもの

その建物に飛び込んだ瞬間、マイダードは自分を包む空間が揺らぐのを感じた。
それと同時に刺青がざわり、と蠢いたのに気づき、眉を顰める。
間違いない、刺青に封じられた妖鬼たちが騒いでいるのだ——しかも、自分にあまりよろしくない方向で。
「まいったね、これは」
罠である可能性が高いことはわかっていた。
今さら驚くようなことではない。
だが——自分たち四人を、わざわざ空間ごと分断する手を打ってくるとは思わなかった。先読みの甘さを悔やむしかないが、その時間さえ、今は惜しい。
建物の内部ではありえない、広々とした空間のなか、ご親切にも道が一本走っている。それを外れたからといって別の空間に放り出されるわけではなさそうだが、出口は道の先にしかな

いのは確実に思われた。
飛び込んできた扉は、背後から綺麗に消え去っているのだから。
そして、道の真ん中で、妖鬼がマイダードを見つめている。
その口元に浮かぶ笑みは、歓喜に溢れたものだ。彼に会ったことに対するそれではもちろんない。
この空間を満たす空気に触れたことが嬉しくて楽しくてたまらないのだ。魔性の力を増幅する特殊な妖気に、刺青に封じられた妖鬼たちが興奮しているように。
「いらっしゃい、わたしの相手はあなた？　なかなか心憎い演出をしてくれるじゃない……仲間をそんな目に遭わせてくれたあなたなら、遠慮なく引き裂けるというものだわ」
マイダードの皮膚の刺青に、同族の気配を読み取ったのだろう――眉間に透明な角を持つ女妖鬼は、酷薄な笑みでそう告げてきた。
その容姿が優れているだけに、その迫力は尋常ではなかった。
「おれだって、人間さまに迷惑かけてない善良な妖鬼を封じるほど見境ないわけじゃないよ。そこのところをわかってくれると嬉しいんだけどね」
こいつらなんて嬉々としておれの眷属殺して回ってくれた連中なんだからさ、自業自得だって。

被害者扱いされるのは、さすがに不本意だ。

告げた言葉に、妖鬼が可笑しそうに笑った。

「それはそうね。あなたが強いのか、彼らが油断していたのかは知らないけれど……そんな状況に甘んじている時点で、救い出してやる価値があるとも思えない」

一緒に引き裂いて——食べてあげる。

美しい唇から、ちろりと赤い舌が覗くのが扇情的と言えば言えるのだが、生憎マイダードはこの場面で相手の美しさに感動していられるほど暢気ではなかった。

「えー、と。もしかして、働いたご褒美はおれってことになるのかな？」

だとしたら、妖鬼の背後にいるだろう妖貴は、ある意味ちゃっかりしている。

倒すべき相手を、そのまま餌に使い回すなど、自分の懐は全く痛まない方法を選んでいるのだから。

まあ……それでもこの場の妖気はさすがと言おうか……あまり嬉しくない援護をしてくれる相手であることに変わりないが。

ただでさえ強い上位妖鬼が、この場の妖気によってさらにその力を高めるのだ。喜んで戦いたい舞台とは言えない。

だが、退路は断たれている。

先に進むしかない。

「魔性とはいえ、女性を傷つけるのは気が進まないんだけど……」

ふう、とひとつ息をつき、マイダードは懐から細身のナイフを取りだした。

「ごめんね」

彼の言葉に、妖鬼の女性は意外なことに「こちらこそ」と返して来た。

てっきり「あなたにわたしを傷つけるだなんて、本気でできると思っているの？」と嘲笑われるか「身の程知らずな！」と激怒されるかどちらかだと思っていたので、これには正直驚かされた。

思わず目を瞠ったマイダードに、美しい妖鬼はにこりと微笑んでこう告げた。

「あなたを引き裂いて美味しく食べてしまうけど、悪く思わないでね？」

※

全身を一度捻られるような感覚が去ったあと、アーゼンターラが目にしたのは、ごく普通の民家らしい部屋だった。

空間が歪んだと思ったのは気のせいだったのか――。

アーゼンターラはそろりと足を一歩踏み出した。
途端に空気が肌に突き刺さるような強烈な違和感に見舞われ、息を呑んだ。
これはどういうことなのだろう——外で怪我の手当てを受けている警備兵の姿さえ、窓から見えるというのに、この家の中は強烈な妖気で満たされている。
結界、という言葉が脳裏に浮かんだ。
考えられないことではない。
扉ひとつ隔てられただけの部屋で、家族に気づかれることなく全身の内臓を食い荒らされ殺されていた少女が何人も見つかったという事件もあったのだ。その時の妖鬼は、部屋の内部にぴったりと結界を張り、その中で助けを求めて泣き叫ぶ少女を、殊更ゆっくり時間をかけて喰い殺したのだ。
外からは感知できなかった濃密なこの妖気を考えれば、考えは間違っていないだろう。
さて、ではどうするか——。
結界を破壊したあと、妖鬼を捜すか——一瞬浮かんだ考えを、アーゼンターラはあっさり一蹴した。
この建物の中には、影を奪われ意識を失ったままの住人がいるのだ。
妖鬼が彼らを襲わないという保証がない限り、結界を先に片付けるべきではない。戦う上で

はそれが正解かもしれないが、住人の命を優先するならそちらは後回しだ。
多少戦いにくいことになるだろうが——罠とわかって飛び込んだのだ。それぐらいは覚悟の上だ。
問題は——。
妖鬼は、どこにいる？
気配を辿ろうにも、室内に満ちる妖気が強すぎる。
「蜜里、お願い」
護り手の名を呼ぶが、なぜか返事がない。
「蜜里？」
周囲を見回すが、小さな黒髪の少女の姿はどこにもない。
隠れているとは思えない——こんな切迫した状況で、そんな悪ふざけをするような少女ではないのだ。
だとしたら、考えられることはひとつきりだ。
「さっきの感覚……あれはもしかして、わたしと蜜里を切り離したの……？」
妖貴である蜜里を相手に、妖鬼にできることとは思えない——ならば、それを為したのは子の家に侵入した妖鬼ではなく、裏で糸を引いている黒幕に違いない。

ぞくりとした。

蜜里が先ほど緊張していた意味が、ようやくわかった。

カーヴィアの中心に突然巨大な光柱を出現させた妖貴のことを、彼女は恐れ警戒していたのだ——こうした事態を懸念して！

確かに、蜜里と引き離されるとは想像もしていなかっただけに、衝撃を受けなかったといえば嘘になる。

不安がないともやはり言えない。

だが、今はそれより先に為さねばならないことがある——不安がっている場合じゃないのよ、と自分を叱咤し、アーゼンターラは先に進んだ。

二階に上る階段が見える。

妖気はそちらから流れ落ちてきている。ならば、倒すべき妖鬼は間違いなく二階にいるということだ。

「紅蓮姫」

未だ鞘に収まったままの破妖刀に、なるべく淡々と彼女は告げた。

「さっきも言ったけど、ご馳走というのは時々食べるからより美味しく感じるとわたしは思うの。その幸せを満喫するためにも、たまには粗食に耐えてみるべきだとは思わない？」

柄ごしに、イヤだと言わんばかりの震えが伝わってくる。
美味しい物だけ食べたいと主張する破妖刀の要求に応え続けるのは大変なことだ——何しろ半端でなく舌が肥満状態の紅蓮姫は、妖貴以上の命しか美味と認めないのだから。
その味を初めて知ったのが十年ほど前だという話なのに、とんでもないことだ。その件に関してだけは、アーゼンターラはラエスリールを未だに恨めしく思わずにいられない。
いや、彼女だとて好きこのんで妖貴や妖主といった大物魔性と戦っていたわけではないだろうとわかる……わかるのだが、それでも。
滅多に食べられないご馳走だから、そういう時は俄然張り切る——ぐらいの状態に留めておいて欲しかった。
「……そんなこと言ったって、ここには妖鬼しかいないの！　ここを切り抜けないと、あなたが望むご馳走にはありつけないの！　仕方がないんだから、割り切りなさい」
この先に待っている妖鬼には間違っても聞かせられない内容を小声で告げると、紅蓮姫が不承不承といった感じで震えを止めた。
先にご馳走があるなら今回は妥協しようということらしい。
ほんと、偉そうなんだから……。
ため息を洩らしながら、アーゼンターラはゆっくりと階段に足をかけた。

この先に待つ、凍りつくような悪意に満ちた罠を、彼女は想像もしていなかった。

気配をひそめ、一歩ずつ階段を上る。

木製の階段は、アーゼンターラが足を進める度に小さな音を立てたが、二階の奥から流れてくる妖気に変化はなかった。

自分を、妖鬼は待っているのだと確信する。

ふと、疑問を覚えた。

この奥で待っている妖鬼は、上ってくるのが浮城の破妖剣士だと知っているのだろうか。

知っていて動揺もなく待ち続けているということは、強力な切り札を持っていると信じているのだ——確かに最強の札はこの建物内に存在する。

妖鬼は意識のないこの家の住人たちを餌ではなく人質として利用するつもりなのだろう。彼らを盾に取られたら、アーゼンターラには術がない。

だとしたら、どうすればいいだろう。

蜜里がいれば、人質の安全の確保を頼むことができた。そうして妖鬼に対峙すればよかった——だが、彼女と切り離された今、その手は使えない。

だが、だからと言って為す術もなく倒されるわけにはいかない。何をしても、何を使ってでも自分は先に進まなければならないのだから！

考えろ、考えろ――それでもできることはあるはずだ。住人を守り、且つ妖鬼を退ける道はあるはず――意識を研ぎ澄ませ、あらゆる可能性を探るのだ。

使えそうなのは、前回の教訓で多めに用意してきた螺旋杖だ――妖鬼がどんな形で住人たちを人質にしているかはわからないが、使い方次第で妖鬼を人質から引き離すことができるかもしれない。

ほかに……他にできそうなことは……。

必死に考えたものの、それ以上の案は出ないままに、アーゼンターラは一番奥の部屋の前にたどりついた。

閉じていた扉が内側から勢いよく開かれたのはまさにその瞬間だった。

「ようこそ、浮城の破妖剣士」

相手を見下すことに狎れた、傲慢な男の声が耳を打つ。

声のしたほうを振り向く必要はなかった――扉の向こう、部屋の奥の寝台の上に、頬の半ばまで羽毛に覆われた異形の男が座っていた。

そして、その両脇に――。

ありえない現実に、アーゼンターラは凍りついた。

「そんな……」

声が震えていることにさえ、彼女は気づいていなかった。
そんな彼女に、妖鬼は勝ち誇った顔でにやりと笑った。
「そんなところに突っ立ってないで、入ってきたらどうだ？　お前はおれを倒しに来たのだろう？　来ればいい、おれはここから動かない」
自らの優位を確信したその言葉に、アーゼンターラは反応することができなかった。
なぜ、どうして――こんなことが!?
彼女は妖鬼の両脇に佇むふたりの存在から目を離すことができなかった。
影を奪われ、意識をなくしたはずのカーヴィアの十万の住民のなかの、ふたり。
虚ろな目をし、妖鬼を庇うように立っている――生ける人形にしか見えないふたりの女性ゆえに、彼女は指一本動かすことができなかったのである。

※

「ターラ！」
見えない壁にこぶしを叩きつけながら、蜜里は懸命に守るべき少女の名を呼んだ。
「騙されないで、ターラ！　それは光柱の作り手が用意したただの人形よ！　カーヴィアの民

じゃない！」

人質じゃないの、そう見せかけただけの傀儡なのよ！

必死に叫ぶが、声は向こうに届かない。不可視の壁はこちらの気配を完全に遮り、アーゼンターラに自分の存在を気づかせることさえない。

こんなに、近くにいるというのに――手を伸ばせば届きそうな場所にいるというのに、壁がふたりを遮って触れさせないのだ。

届かない声、触れあえない手、ここにいることを伝えることさえできない――忌々しい壁は蜜里の力を持ってしても傷ひとつつけられないモノだった。

あの時――光柱を目にした瞬間、覚えた不安が現実となった。

同じ漆黒を纏う妖貴と呼ばれる存在であっても、個々の実力差は存在し、それを覆すことはまずできない。

妖主の側近ともなれば――生まれ持った力そのものが桁違いな妖貴にしか務まらない。圧倒的力で魔性全てに君臨する魔性の王にそば近く仕えるのだ、その程度の力は最低条件とすら言える。

知らなかった――。

蜜里は唇を噛みしめながら、自らの無知と経験の乏しさをそのままにしておいたことを心底

悔やんでいた。

妖主の側近がどれほどの力を持っているのか、自分は高をくくっていたのだ。

たとえずば抜けた力を持たずとも、経験で補う術を浮城に在(あ)れば学ぶことができたのに……絶好の師となり得る存在が、浮城にはいたというのに。

当時、自身をリメラトーンだと信じ、蜜里を拒絶していたアーゼンターラのそばにいることだけを優先した結果、学べるはずのことを学ぶ機会を逸(いつ)した。

最初は妖貴である自分がそばにいる以上、アーゼンターラが危険に晒(さら)されることはないと信じていた。浮城にいる護り手の大部分は自分より力の劣る妖鬼であり、彼らから何かを学ぶなど考えもしなかったのだ。

ほんの一部とはいえ、自分と同じ妖貴がいることを知るのが遅くなったのは、彼らが正式な浮城の護り手ではなかったからだ。

決して彼らに興味を覚えなかったわけではない——そんなはずがない。魔性にとって人間はどれほどの異能を持とうとも、脆弱(ぜいじゃく)な肉体にひとつしか命を持たない儚(はかな)い存在に過ぎないというのに、彼らは自分と同じように、そんな人間を護ることを選んだのだ。

本当は、彼らに近づきたかった。彼らがどうして眷属から憎まれることも厭(いと)わず人間の側につくことにしたのか聞きたかった。

自分がアーゼンターラを好きなように、ほかの妖貴も人間を好きになることがあるのだと、自分だけがおかしいわけではないのだと、確認したかったのかもしれない。

けれど、自分はリメラトーンだと信じている当時のアーゼンターラは、浮城そのものにどこか懐疑的で、深く関わろうとしないようにしているように見えた。

以前とは違い、冷たく「蜜里」と呼ばれることにはどうにか慣れることはできたけれど、冷たくされてもそばにいることは許されていたから、それで充分だと自分に言い聞かせていたけれど——絶対にこれ以上の距離を作りたくはなかった。

アーゼンターラに拒絶されるような材料はかけらとして持ちたくなかったのだ。

だから、好奇心を押し殺し、アーゼンターラ同様浮城の誰とも近しくつきあわないようにしていた。

そうして彼女が「信じられない！　浮城も完全には信じられないけど、魔性に誑かされた罪人にあくまで味方するだなんて、いったい何を考えてるんだ!?」と激昂した相手が、件の妖貴たちが選んだ人間だと知った瞬間、一切の関与を断念した。

いや、自ら関わりを持つことを拒んだのだ。

アーゼンターラにこれ以上嫌われたくない——決して拒絶されたくない。その一心で自分は自分より経験豊かな先達から学ぶ機会を放棄したのだ。

それから事態は変化し、アーゼンターラは自らを取り戻し、蜜里は大切な少女の心を取り戻すことができた。

けれど、アーゼンターラが傷つきながら少しずつでも何かを得て、以前とは違ってきたのに対し、蜜里は全く変わらないままだった。

自ら変化しようと思わなければ、魔性は不変と言って良い。

人間が環境や出来事で否応なく変化せざるを得ないのに比べ、魔性が変わるための条件は絶対的自主性の有無だ。

意識的無意識的を問わず、魔性は自ら望んだことしか、変化として受け入れない。

そうした意味で、蜜里は「ターラに嫌われたくない」という一心で、自ら成長できるかもしれない機会を長いこと拒絶し続けた。

そして、その選択が今の窮状を招いたのだ。

同じ妖貴でありながら、自分とは桁違いの力を持つ敵が現れた時、正に為す術なく空間の隙間に封じられてしまった。

全部、自分が努力を惜しんだ結果に過ぎない。

アーゼンターラがこのことを知れば、自分のせいだと思うだろうが、そうではない。彼女のことはかけがえなく大切に思っているが、自身に関わる判断はあくまで自身の責任で下してお

り、たとえ彼女であろうと、その判断を蜜里から横取りすることは認められない。

アーゼンターラが自らを未熟だと嘆くのと同じく、蜜里もまた未熟だっただけなのだ。そして未熟であることを許し続けた結果が今のこの状況なのだ。

格上の妖貴の術で、あっさりと護るべき相手から切り離され、その相手の危機を歯噛みしながら見つめるしかできないという——この屈辱！

不可視の壁の向こうでは、強大な後見の力を我が物のように振る舞う傲慢な妖鬼が、蜜里の大切な少女を楽しげに嬲っている。

現実の人間ではない、しかも自分が作り出したわけでもない傀儡たちに、自らの首筋に刃を当てさせているだけで、あの妖鬼はアーゼンターラを支配しようとしているのだ。

『ほら、なにを躊躇ってるんだ。その物騒な破妖刀を部屋の外に放り出せと言っているだけだろう？　イヤならいいんだ、イヤならな。代わりにこの娘が喉に押しつけてる刃先を滑らせるだけだ』

そして傀儡は命を持たぬゆえに、条件付けされた仮初めの主である妖鬼の言葉に忠実に従うのだ。

刃物が喉を切り裂こうとするその動きを、アーゼンターラが見過ごせるはずもないというのに！

『止めて！』

真っ青になって制止する少女を、蜜里は止めることができない。

この不可視の壁が蜜里の全てをアーゼンターラから切り離している。

「ターラ、ターラ、ターラ、ターラ！」

やめて、やめて、やめて！

蜜里の叫びも空しく、アーゼンターラは腰から紅蓮姫を鞘ごと外そうとする。

駄目よ、ターラ！　どんな状況に陥ろうとも、あなたの魂を愛している紅蓮姫は、何があろうとあなたを護る絶対の守護者なのに！

本当は自分がそうなりたかった。

そうなれるかもしれない機会を与えられながら摑み損ねた自分だけれど、まだ諦めたわけではない。いつか必ずその座をあの真紅の破妖刀から奪い返すつもりなのだ。

けれど、ターラ！　けれど！

「止めて、ターラ！　今紅蓮姫を手放したら、取り返しがつかない！」

アーゼンターラが殺される——紅蓮姫という最大の脅威を手放した破妖剣士を、妖鬼が見逃すはずがない。

それぐらいアーゼンターラだってわかっているはずだ。それでも彼女は目の前で命が失われ

るぐらいならと絶望的な未来を選び取るのだ。
四年前の彼女の故郷を灼き尽くした炎――無慈悲に命を刈り取った焔の記憶が彼女にそうさせるのだと蜜里は知っている。
もう誰も――誰ひとりとして、自分の前でその命が消えることに耐えられない。
アーゼンターラの強さは弱さと直結している。
喪失を恐れる彼女は失わないために力を発揮する。けれど、その強さは諸刃の剣だ。
今の状況が何より雄弁にそれを物語っている。
命が失われる危険に際した時、彼女は自分の命に関して無防備になる。
この妖鬼の後ろについた妖貴は、きっとそこまで見抜いていたのだ――そして、それを阻むであろう蜜里を最初に異空間に弾いた。
相手の思惑は見えた。
このままアーゼンターラは命を刈り取られる――そんなことが許せるはずがない！
「誰か！　誰でもいい！　ターラを助けて！　ターラを助けるためにわたしを阻むこの壁を壊して！」
それ、は。
魔性のなかでも最上位に位置する妖貴が、他者のために為すはずなどない行為だった。

自身の力に絶対の価値を置き、それを凌駕する力を前にすれば潔く膝を折る——自らの力不足で生じた事態にそれでも足掻き、自分以上の何者かの助力を是が非にも請おうとするなど……そんな、祈りにも似た行為など。

妖貴が選ぶはずもない。

だが、この時蜜里は迷わなかった。

いや、それは彼女の心底から湧き上がってきたのだ。

「ターラを助けてえぇっっ！」

妖主に準じる妖貴の張った結界の中で、魂からの叫びを蜜里が放ったその刹那のこと。

彼女の胸部——正確に言うならその懐の奥から、純粋無比にして強大な黄金の光が溢れ、彼女を包む不可視の檻を粉々に破砕した。

## 2

時間は多少前後する。
臥谷は必死に卵を守っていた。
いくつもいくつも産んだうち、唯一残った大切な卵だ。
自分と愛しい男の命を継いだ次代の命だ――奪わせるわけにはいかない。
なにがあろうと守り抜かなければならないものだった。
「お前はなに!?　何の権利があって、わたしから吾子を奪おうとするの!?」
略奪者を前に、臥谷は牙をむき出しにして叫んだ。
大事な大事な――たったひとつ残った卵……我が子。
それを奪おうとする者が、敵以外のなにものだというのか。
蛇身の下半身で卵を包みこみながら、臥谷は略奪者に向かって吼えるように叫んだ。
「渡さない！　渡すものですか！」

お前などに――！

かっと開いた口が、大きく裂け、そこから毒液を吐き出す。

それは強力な酸でもある。触れただけで岩をも溶かす威力を持っているというのに――それでこれまでの略奪者は撃退できたというのに、今回の相手はそれで退いてはくれなかった。

深紅と金の色違いの瞳――明るい緑の双眸の向こうに、なぜか透けて見えるよく似た、だが違う顔、違う色彩。

その金色の瞳が一際眩しく輝いたかと思うと、空間そのものが撓み、臥谷が吐き出した毒をはじき飛ばした。

臥谷は直感した。

これは、恐ろしい敵だ。

もしかしたら自分では敵わない力を持つ略奪者だ、と。

だが、相手の目的が吾子だというなら、臥谷は戦わずにはいられない。大事な我が子――たったひとつ残った卵。

今度こそ孵化してくれるに違いないのに、どうしてむざと手放せようか。

「吾子はわたしのものよ！」

叫んだ臥谷に、略奪者は静かに告げた。

「違う」
と。
言い聞かせるかのような穏やかな口調が癇に障る。
「違わない！　今度こそ吾子は生まれる！　誰にも邪魔はさせないわ！」
させるものですか――！
臥谷は今度は毒を空気中に撒いた。
細かい粒子に変えた毒は、空気に溶けて相手の肺を腐らせる――これまで例外なく生じてきた異変は、しかしいつまで待っても相手には起こらなかった。
「無駄だ」
どこか悲しげな目をした略奪者が告げる。
臥谷の胸が騒いだ――相手の眼差しに、心のどこかが解けそうになる。
解けて、その言葉に耳を傾けたくなってしまう――そんなことは吾子のためにもできるはずがないというのに！
「無駄じゃ、ない！」
叫んで彼女は再度毒液を空気中に放った――今度は先ほどより細かい粒子に変えて。
相手が風で遮ったとしても、先ほど放った毒は周囲に残っている。それが相手の体内に吸い

込まれればこちらの勝ちなのだ。

だが、風は起こらなかった。

略奪者は静かに佇んでいる——その周囲の空気は澄んだままだ、猛毒を孕んだ周囲の空気の中、さながら繭に包まれてでもいるかのように。

馬鹿な。

こんなことはあり得ない。

臥谷は混乱と恐怖に襲われた。

「お前は何なの!?」

認めたくはない——だが、その声は悲鳴に近かった。

「どうして——何の権利があって、わたしから吾子を奪おうとするの!?」

略奪者のくせに、どうしてそんな静かな——澄んだ悲しげな目で自分を見るのか。

「その卵に宿るのが、お前の子ではないからだ」

略奪者が初めて口にした答えらしき言葉に、臥谷ははっ、と喉を鳴らした。

「馬鹿を言うな。これはわたしが産んだ卵だ。それがわたしの子でないはずがない！」

挑発の言葉に、しかし略奪者は揺るがない。

「確かにその卵に見える形のものを産み落としたのはお前だろう。だが、その中にあるのはお

前の子供ではない。新たに生まれる命ではなく、お前の毒に囚われ意識を失った人間の男だ……今もお前の毒に冒され、弱り続けている。同じことを繰り返し、お前は何度産み落とした卵を失った？　もう、自分でも薄々気づいているだろうに……」

略奪者の瞳に、痛ましげな光が浮かぶのを、臥谷は怒りでもって認めた。

美しい女性の姿をした略奪者――同じ性を持つ者として、なぜ自分の邪魔をするのかと苛立ちを覚えていたのは先ほどまでのこと。

今は――今はただ、目の前の女が憎くて仕方なかった。

なぜ、自分がこんな――初めて会ったばかりの、事情も知らぬに違いない女に哀れまなければならない!?

「黙れ！」

臥谷は殺意を以て、右手を一閃した。

空が切り裂かれ、真空の刃が略奪者に襲いかかる！

何者をも切り裂く刃だ――今度こそ、相手は血を流し、地に倒れ伏すはずだった。

しかし――。

悲しげな目の略奪者は、変わらず臥谷の前に立ち続けていた。

「どうして倒れない!?」

自分が放ったはずの問いが、なぜか悲鳴のように聞こえた。

「どうして吾子を奪おうとするの！　わたしはあの人が我が身を糧にした……あのひとの子供を産んだだけよ！　もうすぐ……今度こそあの人とわたしの子が殻を破って生まれてくれるのよ！　どうして邪魔をするの！　どうしてよ!?」

愛したひとは、臥谷のそばでどんどん痩せ衰えていった。

喪失の恐怖に、臥谷は次代を繋ぐことでそのひとをこの世に繋ぎ止めようとした。

次代の命に繋ぐために、敢えてそのひとを自ら食すことで——そうして卵を産むことで、彼の命を未来に繋ごうと思ったのだ。

彼は臥谷の望みに微笑んでうなずいてくれた。

『愛しい臥谷……君がそれを望むなら、わたしに否やのあろうはずがない』

そう言って、弱った体を次代のために臥谷に捧げてくれた。

泣きながら、臥谷は食べた。髪の一筋、骨のかけらまで余すところなく食べ尽くした。

全ては彼との子供のために——彼の命を糧にして、生まれて来る子供だけを心の支えに、臥谷は産卵した。

生まれた卵。

大切な自分と彼の子供。

なのに、卵は孵らなかった。
いつまでも、いつまでも——なぜだろうと必死に考えた。そうして辿り着いた結論は、栄養の不足というものだった。
愛しい大切な彼。かけがえない唯一無二の彼。
だが、彼は大事な子供のための糧となるには痩せすぎてはいなかったか？　立ち上がることさえできなくなった彼の足は、ほとんど骨と皮だけの状態ではなかったか？
養分が足りなかったのだ、きっと。
だとしたら——方法はあると臥谷は考えた。
あのひとの子供に、あのひと以外の糧を加えるなど本来ならば言語道断だが、この場合は仕方ない。
そう思い、近くを通りかかった男を攫って喰らって——その力を卵に注いだ。
あのひとに足りなかった分を補充するつもりだったのに……それだけだったのに、あろうことか卵は孵るどころか、ある日腐敗臭を放って破裂したのだ。
あのひとの命と体を取り込んで産み落とした卵は、命となることなく消えてしまったのだ。
だが、そんなことは臥谷に認められることではなかった。
あのひととの子供が生まれないなど、あってはならないことだったのだ。

だから臥谷はあのひとの子供となる卵を産み直した。
あのひとではない、似ても似つかぬ男を糧になどしたから失敗してしまったのだ。ちゃんとあのひとを……あのひとの欠片を集めて糧として、そうして卵を産めばきっとあのひととの子供は生まれてくるに違いない。
そう思って、臥谷はあのひとに似た人間を見つける度に、甘美な毒とあのひとに言われた香りで引き寄せた。
彼に似た目の男。彼に似た声の男。笑顔がよく似た男。はにかむ顔が似た男。
いっぱい集めて卵を産んだ。
なのに、それも孵らなかった。
見た目だけが似ていても意味がないのだと思った。
あのひとに似た気配の男。あの人と似た輝きを持つ男。
そうして産んだ卵も孵らない。
どうして——どうして、どうして!?
試行錯誤を繰り返しても、どうにも孵らぬ卵——生まれてこないあのひとの子供。
どうして、どうして、どうして、どうして——。
いつしか臥谷は目的を見失い、彼に似た何かを持つ男を引き寄せては、割れた卵の中に封じ

て卵に見えるモノを作り上げることに固執するようになった。
壊れない卵――孵化はせずとも死なぬ卵なら絶望を二度と味わわずにすむ。
けれど、卵は壊れるのだ。
何度やっても――気が遠くなるほどに繰り返してもなお。
臥谷だとて、もう……とっくに気づいている。
彼も、彼との子供も永遠に失われてしまったことなど。
その後に繰り返してきた行為は、ただ人間の男を無駄に殺してきただけなのだと。
だが、なぜそれを出会ったばかりの他者に指摘されなければいけない!?　認めたくなくて足掻いていた自分を哀れむ目で見るような女に!?
「お前などになにがわかる――!」
孵らぬとわかりきっている卵を抱く蛇身を解き、臥谷は毒を滴らせる牙と爪を極限までに伸ばしながら、容赦なく過去を暴いた無礼千万な略奪者に襲いかかった。
殺してやる――見たくなくて蓋をしていた心の蓋を無理矢理こじ開けた無法者!
お前など――!
千々に引き裂いてやってもまだ足りない!
そう思い、襲いかかった。

だのに——なんということだろう。

想像だにできない事態に直面し、臥谷は相手の正面で凍りついたように動きを止めた。

「なんだ」

臥谷は問いかけずにはいられず、だがその声は動揺に震えていた。

「なんで、お前が——」

泣いているんだ。

そう——。

臥谷の巣を侵し、臥谷の過去を暴き、臥谷の願いを砕いた略奪者である人間の女は——声もなく涙を流して彼女を見つめていたのだ。

「臥谷」

その名は真名——人間などに呼ばれていいものではないはずだというのに、そう呼ばれた瞬間、臥谷の心に満ちたのは慰めであり労りだった。

満たされていく。

これまでの苦痛が、悲痛が——ただ一言名を呼ばれた、それだけのことで！

そんなことは許せない。あれほどの痛み、身を裂かれるような絶望、ついには我を忘れて意味のない行為にのめり込まずにいられなかったほどの衝動。

あれら全てが、こんなたった一言で癒されていいはずがない。
「やめろ！」
臥谷は叫んだ――それは、誰が聞いても悲鳴でしかない声で。
「臥谷」
緑柱石の双眸の恐ろしいほどに美しい女の顔に、悲しげな深紅と金の瞳が重なる。
「愛する者の命を、自らが放つ毒が縮めた……気づいた時にはすでに取り返しはつかず、相手もまたお前から離れることよりお前との未来を望んだ……」
告げられる真実――淡々とした口調で、臥谷が否定しようもなく目を逸らしていた……彼の思いまでも。
「不運にも身を結ばなかったそれが、お前を凶行に駆り立てた。そうと知っていたならば、彼はその命が尽きるまで、お前のそばで過ごすことを選んだだろうに――」
「黙れ、黙れ、黙れ！」
臥谷は矢も楯もたまらず毒をまき散らすことしかできなかった。
臥谷の放つ毒は略奪者には届かない。わかっているのにそうすることしかできなかった。
「臥谷、お前は失われた彼と我が子を追い求めただけだ……けれど」
涙をたたえていた緑柱石の双眸に、すっと厳しい光が点った。

「そうして奪われていい命などひとつとてなかったんだ」

お前のしたことは罪だ——と。

略奪者の瞳が告げていた。

ああ、と臥谷は安堵の息を洩らした。

よかったと、心底から安堵した。略奪者だと思った相手が断罪者であったことに——許しを与える相手でなかったことに、彼女は心底ほっとしたのだ。

燃える緑の陽炎——だが、本当に自分の魂を捕らえるのは、その奥に燃える金色の焔であることを臥谷は知っていた。

「臥谷」

名を呼ばれ、人間の上体と蛇の下半身を持つ妖鬼は、陶然として相手の裁きを待った。

「おいで」

思いもかけぬ呼びかけに、想像外の事態に目を瞠った臥谷は、けれどその呼びかける声のあまりの優しさ故に心を……全てを委ねた。

こんなにも優しい瞳で、優しい声で。

誘われて頷かない者などいない——そう思いながら。

※

世界を震わせ、変容させる力――。

その波動を感じ取り、世界の今は片隅に過ぎない、だがいずれは中心に位置するだろう名もない真空の空間で、激しい怒りに支配された魂があった。

それは、彼――その魂にとって見間違えようのない力の発露だった。

だからこそ、封じたはずの力であり存在だった。

それは決して、今この時点で野放しにされていていいものではなかったのだ。

叶うことなら我が手で成し遂げたかった封じ――だが、その頃自分は自らの力を十全に発揮できない状況に置かれており、信用できる相手がそれをなす事を看過することしかできなかった。

彼の存在に関する全てを支配したいと思うほどに強い執着を抱いておりながら、それが叶わぬ状況に置かれた我が身をあの時ほど呪ったことはない。

だが――それでも、とその時は思ったのだ。

世界の根源を変えるほどの力を示したその存在は、変えられた世界の淵から生まれ出でた存在の少なからぬ関心を引いていた。

闇の淵から生まれた恐ろしい存在の。

闇と呼ぶべきかそれとも深淵と呼ぶべきか——そうした相手と直に対した時、本能的に感じたのは愛憎相半ばする唯一の存在を、この少女の姿を取る闇とも虚空ともつかぬ相手と、決して出会わせてはならないということだった。

なぜなら、両者は相対する存在だと、本能的に悟ったからだ。

出会った瞬間にも、ふたりはそれを感じあい、そうして互いを敵と見なしあうことがわかっていた。

出会わせてはいけない。

それは彼と彼の魂を受け入れてくれたもうひとりの姉の共通した思いだった。

だから、彼女が封じられたことは、彼らふたりにとって喜ばしいことだったのだ。

なのに——。

これは、何だ?

乱華は怒りと苛立ちを抑えきれぬまま、なのにその力の発露に目を奪われる。

輝かしい金色の——。

全身の血が沸騰するかと思った。

それほどの衝撃にして、それほどの怒り。

間違いない——間違いようがない。

こんな輝きを放つ力を持つ者が、自分の知るただひとりの存在でなく、他の誰であるというのか！

ぎり、と唇を噛みしめ、彼は呻くように声を洩らし、次の瞬間その身を彼の地へ跳ばしていた。

「姉上……あなたというひとは！」

どこまでわたしの思いを踏みにじれば気が済むのですか——！

かつてすれ違ったまま、すりあわせる機会を失しつづけた姉弟の心は、また一つすれ違いを重ねようとしていた——。

# 3

切り離されたとばかり思っていた蜜里との合流は突然だった。

目を覆わんばかりの金色の光が視界を覆ったかと思うと、その次の瞬間には「ターラ！」と馴染みのありすぎる声が聞こえてきたのだ。

それと同時に、目の前の妖鬼が仕掛けた目くらましが解けた。

影を奪われ、傀儡のように妖鬼に操られていた女性の姿は消え失せ、代わりに現れたのは見るからに人形とわかる木偶が二体――。

アーゼンターラは自分が欺かれ、嘘によって紅蓮姫を手放そうとしていたことを知った。

「蜜里……ありがとう」

危うく自分で自分の首を絞めるところだった――そう告げると、妖貴の少女は「まったくね」と頷いた。

「ターラは人が善すぎるわ。相手は魔性なんだから、多少は疑ってかからないと、命がいくつ

あっても足りないわよ！」

全くもってその通り――反論の余地がない。

それでも、先ほどまでの状況が、妖鬼の作り上げた偽りであったことに心底安堵する。もしもあれが現実であったなら、自分は本当にどうしようもなく追い詰められていたことだろう。

「ほんと、ありがとう」

二度目の礼に、蜜里は不思議そうに首を傾げた。

「いいけど、ターラ。いつまでもこんなやつに関わってる場合じゃないと思わない？　どうやら入ってきた扉は消えてしまったし、そうなると先に進むしかないでしょう？」

提案しながら蜜里はそっとアーゼンターラの背後に立った。

紅蓮姫をここで抜いてもぎりぎり届かない距離だ。だんだん彼女も紅蓮姫とのつきあいに慣れてきたらしい。

「そうね。空間歪めるぐらいの荒技やってくれる相手だから、進んだ先がどこになるのか少々不安がないわけでもないんだけど……」

こればかりは行ってみないとわからない。

何より道は前にしか伸びていないのだ。

「お待たせ、紅蓮姫――食べたくないなら、あの妖鬼の心臓を潰すだけでもいいわよ。確かに

無理に食べたらお腹を壊しそうだもの」

蜜里が解放されたことで、アーゼンターラの抑えてきた怒りが爆発する。

何もできぬまま、人質を盾にとられて——それが芝居だと気づくこともできずに、もう少しで最強の破妖刀を手放すところだった。

自分の甘さに猛烈な怒りを覚える。

だから。

悪いけど、八つ当たられてちょうだい。

真っ直ぐに妖鬼を見つめながら彼女は笑った。

「蜜里。本当のこの家の住人は？　念のため、保護してくれると嬉しいんだけど」

「結界なら今張ったけど……」

アーゼンターラの心中を正確に読み取ったのだろう、黒髪の少女は悪戯っぽい口調でこう続けた。

「……そんな必要は、あるのかしら？」

これにアーゼンターラはうなずいた。

「全くね。紅蓮姫を持ってて人質はいなくて……それで住人を改めて人質にされるようじゃ、この先が思いやられるものね」

待っているのは妖貴のなかでも上位に位置する恐ろしい相手だ――さらにその先を目指しているというのに、こんなところで足止めを喰らってはいられない。

「大口を……」

妖鬼が怒りに身を震わせながら、鋭い爪で襲いかかってくる！

「叩くのもいい加減にしろっっ！」

「大口じゃないわ」

答えるアーゼンターラに、背後から蜜里が告げた。

「珍しいわね、心臓はふたつよ。けれど命はちゃんと三つ感じるから、取りこぼさないようにしてちょうだい」

心臓は鳩尾と右の脹脛――。

「……痛そうね」

思わず呟いた声に、護り手の少女がくすくすと笑った。

「痛がる暇なんてすぐになくなるでしょ」

「そうね」

と答えて彼女は紅蓮姫を振るった――真紅の刀身が妖鬼の鳩尾に埋まったのは次の刹那のことだった……。

※

「どこへ行く」

雛の君の居城――黒瑪瑙を敷き詰めた長い廊下を足音も荒く歩いていた乱華は、突然声をかけられた途端、不機嫌な面持ちをさらに険しいものに変えた。

深紅の青年に対する乱華の鬱屈は小さくはない。

唯一絶対の姉に対する執着心と独占欲が、彼女に関わるすべてのものを厭わせるのだが、中でもこの男は最悪の部類に入る。

「あなたには関係のないことです」

先ほど感じた金色の力の波動――ラエスリールの気配を感じたことを、柘榴の妖主である男に告げるつもりはない。

いつの間にか彼女の傍らに立ち、さんざん自分を苛立たせてくれた相手だ。この程度の報復は可愛いものだろう。

「失礼」

軽く会釈して、その場を立ち去ろうとした乱華の背中に、冷ややかな声がかけられたのはそ

の直後だ。

「そんな血相で外へ出かけるなぞ……お前はおれが言ったことを聞いていたのか？」

何を、と振り返った視線の先で、皮肉げな笑みを絶やさぬ深紅の男は、なぜか真剣な眼差しを彼――否、緋陵姫に向けていた。

「言ったはずだぞ、外でお前が表に出ることは、緋陵姫の負担を増やす行為だと。どこを目指す気かは知らんが、その肉体で鴉にでも変化するつもりだったのか？」

痛いところを突かれた。

怒りのあまり、そこまで考えていなかったのだ。ただ一刻も早くあの気配のした場所に駆けつけなければ――そう思うばかりで、これが自分の肉体でないことさえも忘れていた。

「それは……」

答えに詰まれば、男を調子づかせるだけだとわかっているのに、うまく切り抜けられないのは、知らず緋陵姫のことを後回しに考えていたことを後ろめたく感じているからかもしれない。

彼女は優しい――きっとそのことで乱華を責めることはないだろう。

だが、その優しさに甘えることは、彼女の負担を増やすことになる。他でもない深紅の青年に指摘されたことが何より悔しい。

きり、と唇を噛みしめた時、ふわりと緋陵姫の意識が浮かび上がってきた。
するりとすれ違うような意識の交代は、すでに慣れたものだ——彼女は決して乱華を押しのけたりしない。
「目的地はわたしも同じです。乱華ばかり責めるのはやめていただきたいですね」
同じ声でも響きが違う。
内側でそれを聞きながら、乱華はよく似た声の硬い口調を思い出す。
「本当にお前は……お前たちは弟に甘いな。おれはお前にも忠告したはずだぞ、弟が可愛ければ無茶をさせるな、と。巨鳥の雛をあまり刺激するな」
雛の君と呼ばれる少女を、男は常にこう呼ぶ。
「あの方は好きにしろと言ってくださいます」
「壊れない程度に、だろ？」
揶揄も露な声に、しかし緋陵姫は動じない。
「柘榴の君。なにが気に入らなくて乱華を殊更に追い詰めようとなさるのですか？　弟は確かにあなたには及ぶべくもなく未熟ではありますが、それはあなたが彼を傷つけて構わない理由にはならないかと思いますが」
冷静な緋陵姫の指摘に、深紅の青年はくつりと喉を鳴らした。

「理由のあるなしで誰かを傷つけた覚えなどないな」

ひどい言い草である——この男は自分のやりたいことをやるのに理由さえ必要とはしないのだ。

「だが、まあ、敢えて理由を挙げるとすれば……甘ったれた態度が癇に障るってとこかな」

面と向かって言うことか！

怒りに震える乱華の意識に、しかし緋陵姫は表に出ることを許さなかった。

「自分が愛されていることを確信した上で、何をしても許されると思っている。どれほど傷つけようと相手が自分を許すと信じている。おれから見れば、卑怯な子供以外の何者でもない。はっきり言って目障りだ」

言葉の刃がぐさりと胸を突き刺した。

傷つけるために力ばかりか言葉を駆使することを、この男は躊躇わない。

「……以前にもわたしも言ったと思いますが、あれがあなたの思い通りにならないのは、あなたの努力不足というものでしょう。変えられなかったご自分を棚に上げて、誰かを責めるのは筋が違うのではありませんか？」

これで口を噤むかと思いきや、深紅の青年はなぜか楽しげに口元を綻ばせた。

「思い通りにならないところも含めて、おれはあいつを気に入ってるからそこは別にいいんだ

よ。それに……あいつを思い通りにできないのはそっちも同じだろう？　お前らは今起こりつつある状況を忌避したがっているようだが、おれは違うんでね。ちょっと横槍を入れてみた」

実に楽しげな顔と口調は、男が本気でそう思っていることを伝えている。

さすがの緋陵姫も眉宇を顰めた。

「本気で仰ってるのですか？」

自分たちが危惧していることの意味を知りながら、「自分は違う」と――それは本気で言っているのか、と。

真摯な光を瞳に浮かべ、問うた緋陵姫に男は「ああ」と頷いた。

「おれに言わせれば、金の野郎もお前たちもあいつを守るという名目で自分のために動いているようにしか見えない。傷つけたくないとか失いたくないとか……もちろん思うのは勝手だが、そのためにあれを型に嵌めようとするのは逆効果にしかならないというのがおれの見立てだ。現に一度、金の野郎は決定的なミスをした。人間だとか魔性だとか、あいつにとっては関係なかったのに、あくまで人間として生かすために、あいつを放り出した。人間の狡くてしたたかで残酷な面をあいつが知らなかったとは思えないが……ある意味娘の強さを信用しすぎていたのかな？　結果あいつは自分が要らない者だと信じて世界を道連れに心中しようとした」

それはふたりにとって全く初耳だった。

「なんですって!?」

緋陵姫の声が掠れていた。

それを楽しげに見やりながら、深紅の男は意地悪く笑った。

「お前たちはあいつの表面的な部分にばかり目が行って、あいつの本質をわかっていない。あいつの誇りはある意味世界中の何者より高いぞ。決して誰かの支配は許さない。自らを押さえつけようとする相手には全力で牙を剝く。ま……ちっとばかし独特な基準で動いてる分、わかりやすくはないけどな」

それ、が男の言いたいことだったのか——男はそれだけ告げると話は済んだとばかりにあっさりと背を向けた。

迷いのない足取りで遠ざかっていく男の背中を見つめながら、乱華と緋陵姫はほんの少しだけ男の言葉の意味を考えた。

誰よりも誇り高く抑圧を許さない——。

だが、ふたりにとってそんな彼女——ラエスリールの姿は想像もつかない別人にしか思えない。

不器用で生真面目で、自分の損になることにばかり首を突っ込んでは傷ついて——それがふたりの知るラエスリールだ。

柘榴の妖主が語ったような、そんな彼女はふたりが知る彼女ではない。
だから――。
結局のところ、彼らが選べる道はひとつきりだったのだ――。

# 第二十五章　絡み、縺れる

# 1

妖鬼を倒し、アーゼンターラがその奥に控えた扉を開けて飛び込んだ先は、円形の広くはない空間だった。

「なに……ここ……？」

予想外の展開に、彼女は訝りを禁じ得ない。

丸く円を描く、広間というほどの面積もない丸い部屋にしか見えない。

いや、違う。

何もないように見えたのは、室内を照らす淡い光のせいだった。

照明もないのになぜか光に満たされた部屋は、その光のせいで細部はぼんやりとしている。

光そのものが、部屋の様子を見えにくくしているのだ。

「いやな感じね」

率直な意見を先に洩らしたのは蜜里だった。

妖貴である彼女には、アーゼンターラより部屋を満たす光の意図がはっきりわかるらしい。

「悪質だわ」

嫌悪も露に蜜里が言う通り、室内の様子がわからないように光を配置してあるのは、ここに導いた魔性の悪意としか思えない。

だが、光を目くらましに使っているとわかった時点で、探るべき点も見えてくるというもの——アーゼンターラは目を細めながら、光源不明な光を無視し、先に繋がる扉を捜した。

視界だけでは追いつかない。

だが、壁に指を辿らせ、細かな凹凸までも探ってみれば、自分達が出て来た扉のすぐ隣に、微かな違和感を感じ取ることはできた。

「条件を満たしただけで、簡単に答えが見つかると思うなってことかしら」

だとしたら、この罠を仕掛けた魔性は、かなり性格に捻りが入っている。

いや、もしかしたらそれが普通なのかもしれない——とは、アーゼンターラが別の視点で感じたことだった。

たとえばこれが魔性対人間ではなく、人間対人間の勝負だったとしたら。

そして、直接的な命の危険を覚えないゲームの一環として参加したものであったら——普通の人間は他者を出し抜くために騙しの仕掛けを施すことを楽しみながら編み出すに違いない。

この丸い部屋に仕掛けられた細工は、そんな状況を連想させる。
遊ばれている。
アーゼンターラは唇を噛みしめた。
一方的に仕掛けられた罠――支配権は向こうに握られている。それでも自分たちは退くわけにはいかない。
「これが先に繋がる扉だとして……取っ手がないということは、引くのではなく押せば開くということかしら？」
つぶやきながら、アーゼンターラは試しにそこに力をかけてみた。
きい、と音を立てて、扉を思しきものが向こう側に動いたのを確認し、彼女は「当たり」と小さく洩らした。
「ターラ」
「行こうか」
蜜里を振り向き、彼女はにこりと笑った。
きちんと笑えているかどうかわからなかったが、蜜里は答える代わりにアーゼンターラの左手をきゅ、と握ってきた。
この手は決して放さない――。

そう言われているような気がして、アーゼンターラはその手を黙って握り返した。
出会ってから、ずいぶん遠くに来たような気がした。
だが、目指す場所はまだ遠い。
脳裏に浮かぶのは、傷ついた目をした弟の顔だ――待ってて、とアーゼンターラは胸中で呟いた。
そして、踏み出す――扉の向こうへ。
だが、それも用意された罠のひとつだと、この時彼女は気づけなかった。

※

空を駆けて辿り着いた先――そこに求める人物ではない別の、思いもかけない女性の姿を認めた瞬間、乱華の中に湧き上がったのは強い衝撃と驚愕、そしてそれ以上に大きな怒りの念だった。
流れる漆黒の髪――透き通るように白い肌は、彼の記憶にある病がちな青みを帯びたものではない。
かつて常に感じていた危うい線の細さはそこにはなく、明らかに記憶より若々しいその姿

――だが、そんなものは否定の根拠にはならない。

死んだはずであろうと、昔より若返っていようと、気配が彼の知るものと違っていようと、それが何だというのか。

彼女は、彼女だ。

こちらの気配に気づいたのだろう、驚きを隠せない様子の女性のそばに降り立つと、乱華は「なぜ」と問いかけた。

訊きたいこと、告げたいことは別にあるような気もしたが、他に言葉は出てこなかった。

「なぜです」

胸にうずまく激情に、思わず声が震えた。

歓喜ゆえではない――これはどうしようもない憤怒だ。

「死者が今さら……こんなところで何をなさってらっしゃるんです」

母上――と、呼びかけることはできなかった。

喉の奥に塊が詰まって、どうしてもその言葉だけが出てこない。

黒髪の女性――チェリクは、驚きが大きいのかすぐには声も出ない様子だった。

だが、その緑の眼差しを見れば、彼女が正確に自分を……否、自分たちを見つめているのがわかった。

明るい緑柱石の双眸は、記憶にはない不思議な光を宿している——得体の知れぬざわめきが胸に起こった。いや、これは自分ではなく、緋陵姫の動揺か。

「リーダイル……？」

チェリクの口元が嬉しそうに綻んだ。

だが——その声が、その名が、乱華の怒りを爆発させた。

「その名で呼ぶのはやめてください！」

冗談ではない。

それは弱さを秘めた人間の子供の名だ。

そんなもので呼ばれるなど、到底我慢できるものではない。

「わたしは乱華です。いや、そもそもあなたに名を呼ばれる謂われはない」

とうに死んだ身のくせに。

未だ幼いラエスリールにたったひとりで弔いまでさせたくせに。

彼女を自分のそばから遠ざけるきっかけになったくせに。

今さら、何のつもりで生き返ったというのか。

「勝手に死んで、あなたはわたしたちを放り出していなくなったんです。あなたがいなくなったせいで、姉上が……ラスがどんな思いを味わったと思ってるんですか！　今さらどの面下げ

て戻って来たと……！」

叩きつけるような乱華の糾弾に、チェリクは困ったような顔をした。

傷つけてやるつもりで放った言葉だというのに、彼女は余裕で受け止めている——それがまた悔しくてならない。

「それを言われると返す言葉がないのだけれど……今しか、わたしにしかできないことがあるから、戻って来たと言えばいいのかしらね」

その言葉に、乱華はふん、と鼻で笑った。

「大層な自信をお持ちのようですが、あなたに何ができるというのです。たかが妖鬼に他愛もなく殺されてしまうような無力な人間の分際で、自惚れるのも大概になさるがいい」

母であるチェリクが強大な魅了眼の持ち主であったということを、乱華は父から聞いた話でしか知らない。

父に匹敵する力の持ち主であったのだと——あの父が語ったのだ、当時の乱華に疑う理由などなかった。

だが、実際に彼女がその力を揮う姿を目にしたことはない。

病のせいか、それとも別に理由があったのか、彼が物心ついたころには、彼女にそれらしき力はかけらも感じられなくなっていたのだから。

そして、あの無様な死に様だ。ラエスリールを巻き添えにしなかったことだけは評価してもいいが、到底王蜜の妖主に選ばれた伴侶の最期には相応しくない。

そう、彼女は父に選ばれる資格など、最初から持たなかったのだ。

「今さらのこのこ出て来るなど、目障り以外の何物でもない。恥というものを知っていれば、到底こんなことは……！」

傷つけるための言葉はあとからあとから溢れてくる。

なのに、チェリクは気分を害した様子ひとつ見せないのだ。相手にされていないような、屈折した敗北感が神経を逆なでる。

そもそも、捜していたのはとうに死んだはずの母などではなかったのだ。

世界を震わす強大な魅了眼の気配の主を——封じられたはずの姉をこそ、自分は求めてここに来たのだ。

母になど、会いたかったわけでは……。

そこまで考えた時、乱華ははっと息を呑んだ。

かつて、話に聞いただけの、母が持っていたという魅了眼の力。

いつの間にかなかったも同然のものだと切り捨ててしまっていたが、目の前の母が生前の自分が知る彼女と同じかどうかはわからないのだ。

父が賛美さえした母の力――そして今目の前に立っている母は、記憶より明らかに若い姿をしている。

「まさか――」

そんなはずはない。

あの強大な力の揺らぎ――あんなものが、純粋な人間によって引き起こされるはずがない。あんな力は人間が持てるものではない。

だが、人間が王蜜の妖主の心を掴むこと自体あり得ない話だ。

そのあり得ない奇跡が起こったからこそ、自分とラエスリールはこの世に生まれた。では――自分がラエスリールのものだと信じたあの力は、輝きは。

「あれは……あなたのものだったのか……？」

慇懃な言葉が零れ落ちるほどの衝撃のなか、乱華は力ない声を洩らした。

そんなはずがないという思いと、そうかもしれないというそれが心の中でせめぎ合う。父が認めた魅了眼もまた、彼女の甦りと同時にこの世に戻ってきたのだとすれば、あれがラエスリールだという根拠は消える。

では、自分の懸念も不安も、ただの杞憂に過ぎなかったのだろうか？

ラエスリールは今も封じられたまま、雛の君の関心という脅威から守られたまま安全だと信

じていいのだろうか!?

だとしたら――。

自分は喜ぶべきなのだろうか？

この時に至ってようやく、乱華は自分が混乱している事実に気づいた。

母の姿を目にした瞬間、彼の中からはじき飛ばされた冷静さは、気づいたところで戻って来ない。

何をどう感じていいのかもわからずに、彼は言葉を失った。

「リーダイル」

チェリクの呼びかけに反発することさえ忘れて、のろのろと顔を上げた彼は、緑柱石の双眸が謎めいた光を強めていることに気づき、漠然とした不安を覚えた。

いや、これもまた杞憂なのか――それとも今度も緋陵姫の思いなのか。

わからぬままに、じっと見つめ返すと、チェリクの目に痛ましげな光が浮かんだ。

「奥にいるのは……緋陵姫ね？　ラスと一緒に生まれて来たもうひとつの命……わたしのもうひとりの娘……」

ああ、と思った。

このひとは、緋陵姫のことをそんな風に受け止めているのかと。

翡翠（ひすい）の妖主によってこの世に生み出されたラエスリールの守護者としてではなく、自分が彼女をもうひとりの姉だと思っているように、もうひとりの娘だと。

それが純粋に嬉しいと、この時初めて彼はチェリクに対して好意を抱いた。

すぐにそれを悔（く）やむこととなるとも知らずに――。

## 2

その姿を目にした瞬間、衝撃を受けたのは乱華だけではなかった。
緋陵姫もまた、黒髪の麗人の姿に動揺を覚えずにはいられなかった。
但し、それは乱華が覚えたものとは種類の違うもので、だが緋陵姫自身にも完全に把握できるものではなかった。
はっきりと言えることは、その眼差しが向けられた刹那、全身に戦慄が走り抜けたということだけだ。
緋陵姫にはわかった——それは自分にはない魅了眼の放つ力だと。
彼女が人間の身に余る力を抱えているのは明らかだった。
これがチェリク——ラエスリールと乱華を産んだひとなのか。
自分にとっても母であるはずだが、そうと感じられないのは、緋陵姫という個としての誕生の瞬間が、翡翠の妖主によってもたらされたものであるせいかもしれない。

ラエスリールを守る守護者。

そう生まれ落ちた自分を姉と慕ってくれる乱華の心は嬉しいが、自分はやはり守護者だという意識のほうが強い。ラエスリールより乱華を優先するかのように見えるかもしれないが、乱華をそばで支えることは、守護者としての本能に外れたことではない。

敵対しようとも、ラエスリールは乱華を弟として大切に思っている。かけがえのない肉親の心を守ることは、彼女の望みに則したことだ。だから、乱華が望む通り、姉として振る舞うことにも否やはない。

だが、チェリクを母と呼ぶことは、それとは大きく違うような気がした。

何より——慕わしさより懐かしさより、彼女に対して感じるのは不安と恐怖だ。

この華奢な女性の瞳に宿る強大な力が、緋陵姫に何かを訴えかける。

それが緋陵姫にとっては恐ろしい。恐ろしくてたまらない。

自らの不安が乱華に伝わらぬことを願いながら、緋陵姫は奥からふたりの会話を見守りつづける。

乱華の意識が何故に混乱しているのか、一歩引いた場所から見ている緋陵姫には手に取るようにわかった。

ひどい言葉をあえて選ぶのは、自分の傷を相手に思い知らせたいからだ。

あなたのせいで自分はこんなにも傷ついたのだと。あなたのせいで自分はこれほどに苦しんだのだと。

傷つけることで、彼は自分が受けた痛手を母に訴えかけている。

あなたが死んだせいで――。

それからの苦しみは全て母のせいなのだと――本人は自覚していないようだが、それは彼女を母だと認めた上で、甘えているも同然だ。

どれほど傷つけても相手が自分を許さないはずがないという、確固たる思いが底にあるから、彼は躊躇うことなく言葉の刃を振るうのだ。

そして、傍目には決して親子には見えない若い女性の姿をしておりながら、チェリクはそのことを理解している。だからこそ、乱華の言葉を受け止めているのだ。

彼女は紛れもなく乱華の母親だった。

なのに、なぜこの心は恐れを捨てきれないのだろう――チェリクの持つ魅了眼の力が未知数だからというのでは理由にならない。ラエスリールのそれの強大さを聞いても恐ろしいとは思わなかった。世界を壊しかけるほどの力だと言われても、驚きはあってもこんな不安は覚えなかった。

何が違うのだろう。

自分はチェリクの何を恐れているのだろう。

わからない——ただ、あの緑の瞳を向けられるのが無性に怖い。

底の見えない淵を覗きこむ時に感じる不安と恐怖にもそれは似ている。違うのは、見ているのはチェリクであって、自分ではないということだ。

そう、見られている——のだ。

緋陵姫はそのことに気づき、愕然とした。

乱華が宿った緋陵姫の肉体を、ではない。チェリクはそこに乱華を確かに認め、さらにその奥にいる自分まで見通している。

母としての眼差しを乱華に向ける一方で、彼女の魅了眼は自分に向けられている。何もかもを暴く凶暴な力で以て、彼女は自分を探っているのだ！

それがはっきりしたのは、彼女の口から自分の名が出たときだ。

しっかりと乱華の奥にいる自分を見つめたその瞳に、痛ましいものを見たと言わんばかりの色が浮かんだ。

見抜かれている——ぞっとした。

チェリクには、この自分の真の姿が視えている！

悲鳴を堪えるのが精一杯だった。

何も考えられない。恐怖のままに、緋陵姫は動いた。
「……わけにはいかない！」
叫びを上げながら、彼女はその場を逃げ出した。
あの恐ろしい瞳から、一刻も早くこの姿を消してしまわなければ取り返しがつかなくなる。
ただそれだけを思って、彼女は宙を駆け出した――！

※

『姉上！　姉上！　どうなさったのです!?』
いくら問いかけても緋陵姫からの答えは来ない。
ただ、伝わって来るのは恐怖だ――魂の底から、彼女は怯えきっている。
乱華は困惑を隠せない。
こんなことは初めてだった。
肉体の正当な主であるにも拘わらず、緋陵姫は乱華の意識を迎え入れてからというもの、一度も勝手に肉体の支配権を奪ったことはない。
あの気にくわない柘榴の妖主の舌鋒から自分を庇うために表に出てくる時でさえ、一言「代

わる」と断りを入れることを忘れないひとなのだ。

その彼女が、突然自分を押しのけ、表に出たかと思ったら、次の瞬間あの場から逃げ出したのだ——自分の声さえ届かぬ様子で。

何があったのか——自分が気づかぬ内に、母がなにかしたのだろうか!?

もうひとりの娘と呼びながら、彼女をこれほどに怯えさせるようななにかを？　そんなことが可能なのかどうかさえ、乱華には判断できない。

だが、母と見えるまで、緋陵姫がこんなに取り乱したことはなかった——こんなに恐怖に縛られるようなことは。

だとしたら……出会ってまもなく、母は間違いなく何かをしたのだ。恐らくは緋陵姫にとっては不本意この上ない真似を——そうでなければ説明がつかない。

許せない、と乱華は思った。

どんな理由があろうとも、緋陵姫を害する行為は認められない。先ほど感じた小さな好意など関係ない。

母は——あの甦った若い女は緋陵姫を脅かす存在なのだ。

敵と見なすのに、それ以上の理由はいらない。

だが、このままでは何もできない——恐慌状態に陥っているらしい緋陵姫は気づいていない

ようだが、乱華の感覚は自分たちを追ってくる複数の気配を捉えていた。
逃げ切れるかどうか——いや、できないと直感する。相手は妖貴だ——しかも、隠してはあるがその力は相当のものだとわかる。
闇雲に宙を駆けたところで彼らを振り切ることはできない。
なぜ、妖貴が……と思わないでもなかったが、問題はそんなことではないと思い直した。
父をも捕らえた魅了眼の主ならば、妖貴を味方に引き入れることなど容易いに違いないからだ。
問題なのはこれからだ。振り切ることが難しい複数の妖貴を相手に、どうやってこの姉を守ればいいのか、だ。
怯えている彼女の隙を衝いて意識を交代することは恐らく難しくはない。
だが、そうしたところで彼女を守るための力は振るえない。出かける寸前に柘榴の妖主に釘を刺されたことを忘れるはずがない。
一度冥の海に落ちた緋陵姫の心身は、意識だけとはいえ生者である乱華が宿っているだけで大きな負担となっている。さらに力など使えば、それはどれほど彼女を追い詰めることになるかわからない。
守るつもりが彼女の命を縮めることにすらなりかねないのだ。

そんなことができるはずがない。だが、自分がこの肉体に宿っている限り、姉を救う手立てはないのだ。

ふと、以前交わした雛の君との会話が甦った。

『あなたの器が盗まれたりしなければ、いくら緋陵姫が望んだところで、あなたを彼女のなかに宿したりはしなかったのに』

格別に気に入っている緋陵姫を、乱華に横取りされたように感じたらしい少女が、ため息交じりに洩らした言葉——。

あの時は別段不自由も覚えていなかったので聞き流した。本来の肉体でないならば、器となるそれらに個別の意味はない。

だが、そのことを今思い出したことには意味がある。

雛の君が用意し、盗まれたという乱華のための肉体がこの世にあるというのなら、それは今こそ役立てるべきものだ。

どこにあろうと、捜し出す。そうしなければ緋陵姫を守れない。

乱華は心を決めた——なぜ盗まれたのか、なぜ緋陵姫が敢えて自らの内に自分を迎えることを望んだのか、そんなことを考える必要性すら感じなかった。

『姉上。姉上、聞こえますか？　申し訳ありませんが、少しだけお体をお借りします……』

聞こえぬのを半ば承知で、乱華はそう緋陵姫に声をかけると、次の瞬間肉体の支配権を奪い取った。

飛行を続けながら、意識を広げた——どこまでも。

どこだ、どこにある——わたしのために用意された肉体よ。

語りかけ、呼びかける……雛の君の手によるものであれば、某かの反応が返ってくるはずだという確信があった。

見つけ出す。そして、自由に力を振るえる肉体を手に入れるのだ。

それは、意外な方向からもたらされた。

あれは、白砂原……まさか浮城に保護されているのか？

だとしたら多少面倒かもしれないと思った乱華だが、すぐにそうでないことがわかった。

白砂原の外れ——緑に包まれた小さな家の庭先で、怪訝そうに空を見上げる青年の姿が視えた瞬間、乱華は雛の君の皮肉に嗤った。

半人半妖——金髪に緑の双眸。その顔立ちは自分のものに酷似している。

だが、同じではない。多少の差異がどれほどの影響を与えるのかは不明だが、自由に力を振るえる分望ましいというものだ。

乱華は新たな肉体を手に入れるため、飛行速度を上げた。

急がねばならない。

かかっているのが緋陵姫の安全である以上、今回の無茶に関しては雛の君から咎められることはないだろう。

『姉上……もう少しだけ、無茶をお許しください』

届かぬ声を向けながら、乱華はきり、と唇を噛みしめた——。

※

雛の君の居城の一室——宛がわれた部屋の長椅子に寝転びながら、深紅の青年はく、と唇をつり上げた。

「毒入りの果実と知りつつ、それでも手を伸ばすか——」

気の毒に——。

全くそう感じていない口調でつぶやきながら、青年はここではないどこかを見つめる。

「巨鳥の雛は喜ぶだろうな。大事な玩具から邪魔な小僧が離れる上に、決して自分を裏切れない駒がひとつ手に入るわけだから……」

雛の君が用意した肉体に宿るということはそういうことだ。

意識は支配されずとも、器は彼女の支配下にある。乱華は彼女に繋がれるのだ。

そのことを乱華自身が気づいているかどうかはわからない。だが、恐らくは手を伸ばすことを選ぶだろう――緋陵姫を喪わないために、他に術はないのだから。

「さすがは第六の君にして世界の王、か……？　何のかんのと邪魔が入っても、要の部分は全部あの雛に都合よく回ってやがる」

それは世界が彼女を王と認めている証なのか――。

彼女による破壊と再生を、世界が自ら望んでいるとしか思えない成り行きだ。

だが、最強の切り札はまだ場に出されてはいない。

そのことを知るのは青年を含めて数人だが、誰もそのことを口にはしない。何しろその切り札は強力であることは確かだが、余人の手に余る代物だからだ。

また、問題はそれだけではない。

雛の君がまだ最後の鍵を手に入れていないのと同様、切り札にもたったひとつだけ足りない物があるのだ。

鍵を握るのは――。

「あの頑固者は今の状況をどう考えているんだろうな」

くつくつとひとしきり笑ったあと、深紅の青年は長椅子から起き上がった。

せっかくの見物を放っておく手はないというのが理由だ。

「さぁて……お前には会えるかな？」

どちらでもいいと取れる声でつぶやくと、青年は部屋を後にした――。

## 3

誰かに呼ばれたような気がして、濫花はふと首を傾げた。
「どうしたの？」
ここ数日床についたままのマンスラムが尋ねるのに、何でもないとかぶりを振って、濫花は家の庭に出た。
呼ぶ声は聞こえない。
だが、何かが近づいてきているのがわかる。
なんだろ、これって。
その気配を恐ろしいと感じる一方、嵐のような歓喜がこみ上げてくる。
矛盾するその感情に、濫花は戸惑いを禁じ得なかった。
あ、おばちゃんには出てこないように言っといたほうが良いかな？
だが、それより自分が家から離れるほうがいいと判断し、彼は「水汲みに行ってくるから」

と言い置くと、一応バケツを手に、家の裏にある泉に向かった。

呼ばれている感覚は、どんどん強くなっていく。

どこからか、誰かが自分を呼びながら近づいて来るのだ。それは自分にとってどんな意味を持つ存在なのか——生憎(あいにく)濫花には判断する材料がなかった。

だから、その存在が泉のほとりに降り立った時は驚かされた。

その姿があまりにも懐(なつ)かしいひとに似ていたからだ——自分を拾って育ててくれたそのひとに。

「姉ちゃん……？」

確か浮城(ふじょう)の氷室(ひむろ)で眠っていると聞いていた。

いつの間に目が醒(さ)めたのだろう——ぼんやりとそう考えた濫花は、自分が思い違いをしていることに気づいた。

ラエスリールの目は右が琥珀(こはく)で左が深紅(しんく)——なのにその女性は、右目が緑で左が琥珀色だったのだ。

何より、その女性を包む空気が彼女とは違う。切り裂くような冷ややかな空気は、彼女から感じたことのないものだ。

「……じゃ、ないね。誰？」

問いに答える声はなかった。
代わりにかけられたのは、傲慢なそれだ。
「お前の体をもらいに来た」
簡潔な言葉には、何の感情も宿ってはいなかった。
濫花に対するものは何も——そのひとは、この身に宿る濫花という意識など、何とも思っていないのだ。
思い出すのは、生まれて間もない頃、繰り返し聞かされた言葉だった。
『要らないのに、どうして意識が宿っているのかしら？　欲しかったのは器だけで、そのつもりで作ったのに』
要らない、要らない、消えてしまいなさい——。
そこにいる間中、ずっと聞かされた女性の声は、目の前のひとのものとは違う。
けれど、理屈ではない本能の部分で、あの声の主が用意したがっていたのは、このひとのための肉体だったのだと理解してしまった。
あの声の主と同じ、このひとは自分の肉体だけを欲している——ならば、自分のこの意識はどうなってしまうのだろう。
ぞくり、と背筋に冷たいものが伝った。

この時になって初めて、濫花は自分の命が脅かされていることに気づいたのだ。

「あ……」

逃げなければ、とそう思う。

だが、足は地に縫い付けられたように、ぴくりとも動かない。

どうしよう、どうしよう……！

このままではこのひとに、体を奪われてしまう。

声の主が望んだ通り、自分はこの世から消えてしまう！

「い、いやだ……」

がくがくと震えながら、濫花は頭を振るのがやっとだった。

怖くて、恐ろしくて——逃げなければいけないのに！

優雅な足取りで、そのひとが近づいて来る。そして、その細い腕が自分に向かってのばされた、その時——。

ふわり、と森の気配が濃くなった。

深い森にいるような、澄んだ清涼な空気が濫花を包みこみ、彼はようやく息をついた。

目の前に、いつの間にかもうひとり女性が現れていた。いや、それは現実ではない。なぜならその人は半ば透けているのだから。

長く豊かな緑の髪、褐色の肌はまるで森の化身だ。恐ろしいひとが、驚いたように現れた女性を見つめていた。

「なぜ……」

そのひとが呟くのと、女性が濫花に命じたのは同時だった――女性のそれは、耳を打つ声ではなかったけれど。

『行きなさい』

理由はわからないが、体の震えは止まっていた。

濫花は後ろも振り返らず、その場から逃げ出した。

※

乱華は自分が目にしているものが信じられなかった。

死んだはずだ――そして緋陵姫と違い、彼女は雛の君に甦らされることはなかった。

翡翠の妖主――彼女はすでにこの世に存在しない。

では、これは誰なのだ。緑の髪と褐色の肌、極上の翡翠を双眸に持つ実体を持たぬこの女性は!?

「どうしてあなたが……いや、今はそんなことはどうでもいい。退いてください、翡翠の君。わたしはどうしても、あの肉体を手に入れなければならないのです」

逃げ出した青年を追うには、彼女の横を通らなければならない。

だが、そうしようとする度に、翡翠の妖主の幻のような女性は、腕を広げて行く手を遮るのだ。

「翡翠の君！」

『駄目よ、乱華。あの器に手をのばしては、駄目。あれはあなたを切れない枷に繋ぐもの……一度宿れば二度と元の肉体には戻れない』

それは薄々感じていたことだった。

あの雛の君がなんの保険もかけずに自分に自由になる器を用意するとは思っていない——緋陵姫と違い、自分があの少女に好かれていない自覚はある。

それに——。

「元の肉体、ですって？」

くつりと笑って彼は続けた。

「あれが今どんな状態か、あなたはご存じないのですか!?　あれは二度とわたしのものにはならない。わたしは二度と戻れない！」

『そんなことは……』

ない、とでも言うつもりか――乱華は翡翠の妖主の残滓としか呼びようのない女性に冷笑で答えた。

「第一、仮に戻れるとしても、今でなければわたしには意味がありません。わたしに必要なのは、今この時自由に力を振るえる肉体なのです。いつか戻れるかもしれない体など、最早どうでもいいのです」

おわかりになったら、どうか退いてください。

じりじりしながら乱華は頼んだ――相手が緋陵姫を生み出してくれた恩人でなければ、とうに無視していたところだ。

だが、彼の気持ちを知ってか知らずか、翡翠の妖主は動かない。

『わたしはすでにこの世の者でなく、このわたし自身かつての欠片に過ぎないけれど、わたしはあなたと緋陵姫が可愛い。だからあの子供を逃がしたのに……お願いよ、乱華。どうか自らの首を望んで絞めるような真似はやめなさい』

彼女の善意を疑うことはできない。

だが、それをきけるかどうかはまた別の問題だった。

彼女が何と言おうとも、自分には自由にできる肉体が必要なのだ――妖貴を従えた母はもう

近くまで来ているはずなのだから。追いつかれたら、自分にできることはない。

だから、何としても自分は――！

「あなたと問答している暇はないと申し上げているのです。これが最後――退いてください。わたしがあなたに敬意を払っているうちに」

『乱華、緋陵姫は何と言っているの？』

斬り込まれた言葉に、乱華のなかで何かが切れた。

「あなたに心配していただく必要はない！　退け！」

強烈な意志が、力そのものと化して辺りを払う。

幻影に等しい翡翠の妖主であったかけらは、その怒気に触れると、耐えられないように震えて消えた。

乱華を阻むものは、もう何もなかった――。

※

その印象は鮮烈の一語に尽きた。

今でもそのときのことは克明に甦る……漆黒の髪を風に靡かせながら、まだ幼さの残る少女

が眷属の命を解いていくのを、彼女――旺李はうっとりと見つめていた。
『そんなにも、魅縛師が憎いの？　自分たちの心を奪うから？　たかが人間に膝を屈することは死にも等しい恥辱だと思っているの？』
命を解かれ、消滅の危機にある妖鬼に対して感じるほどのものはなかった。
浮城の魅縛師を忌々しく思う気持ちはわかるが、彼の行為は独善的且つ美学がない。
魅縛師に従うふりをして、隙をついて殺すなど――旺李にとっては醜悪な暴虐以外の何物でもなかった。
魅縛師はその魅縛の術以外に魔性に対抗する術を持たない。魅縛師に勝負を挑むなら、最後まで相手の力に抗しきり、膝を折らぬことで示すべきだ。
現に旺李はこれまでそうやって幾人かの魅縛師から勝利をもぎ取っていた。
だから、男の命が消えることに対する感慨などなかった。何より、その美しい少女から放たれる光が男を滅ぼすさまがあまりに美しく、その感動に浸るほうが重要だった。
囚われても良いかもしれない。
浮城の魅縛師に対してそう感じたのは初めてのことだった。
あの比類ない眼差しに見つめられるのなら、それぐらいの価値がある。
そう思った時には心は決まっていた。

だが、他の人間や眷属の前で、彼女に膝を折るのはいやだった。灰牙のような理由ではない——生涯を通じて恐らく一度きりの儀式になるのだ。

余人を交えず執り行いたいではないか。

だから旺李は機会を待った——少女がひとりきりになるのを待って、彼女の前に姿を現したのだ。

月が美しい夜半だった。

月光を浴びた少女は昼間以上に美しく見えた。妖しく輝く魅了眼に、ため息が洩れた。

昼間の件を見ていたことを知らしめるつもりで、旺李はわざと灰牙と同じことをした。

彼女の前に跪き、名乗った上で告げたのだ。

「あなたに仕えましょう、月のように美しい浮城の魅縛師よ」

その言葉に、少女が驚いたように目を瞠った。

次いで、呆れたような苦笑が口元に浮かんだ。

旺李は楽しくなってさらに続けた。

「どうか我が名をお受け取りください。そしていかなるご命令でも——」

そこまで言った時、少女が弾けたように笑い出した。

「我が君までは結構よ、旺李。ありがたく名前は受け取らせてもらうわね」

昼間の同僚と同じ真似をあえて繰り返すあたり、大した度胸だと思った。
そこもまた、気に入った。
にっこりと笑う少女は、昼間の鮮烈な印象とはまた違う無邪気さを醸し出しており、それもいいと旺李は思った。
もうこの時には気づいていた。
囚われてもいい——など、嘘だ。
自分はこの少女にこそ、捕らえてもらいたかったのだ。
だから、次に告げられた言葉には落胆した。
「けれど、旺李。多分わたしは誰かひとりを護り手に選ぶことはできないわ。あなたがわたし以外の浮城の人間を守るのがいやなら、今そう言ってちょうだい。幸い他に誰も見ていない誓いだもの。わたしがあなたに名前を返しても何も言われないわ」
好意から言ってくれているのはわかったが、その内容はどうにもいただけない。
「あなたに熱烈な信奉者が数多くいることぐらいは想像がつきます。でも、わたしは嫉妬した眷属からの風当たりを不安に思うほど弱くはないわ」
口調の変化に気づいたのだろう——少女がまた目を瞠る。
「大した自信家ね！　そこまで言ってくれるのなら、わたしとしても試してみなければならな

いでしょうね。その代わり、風当たりのあまりのきつさに泣き言を洩らしたら、いまの言葉を繰り返してうんと馬鹿にしてやるわよ？」

悪戯っ子のような笑顔に、つい引き込まれる。

「誰がそんな無様な真似をするものですか。いざとなったらあなたの信奉者たちを死なない程度に躾けてあげるわ」

強気な言葉は見栄でもはったりでもなかった。

数カ月後、実際に旺李はその通りにしたのだから。

幸せな幸せな出会いだった——引き裂かれるような心の傷を負う別れの時でさえ、彼女との出会いを不幸だと思ったことはなかった。

※

夢に似たものを見るようになったのは、マンスラムの体に共生するようになってからだ。

そのせいだろうか、夢を見るのが楽しくなった。すり減るほどに繰り返した記憶でも、夢で見るといつも新鮮な感動を味わえるのだ。

マンスラムは眠っている——もしかしたら、旺李と同じ夢を見たかもしれない。きっと目覚

めたら呆れられることだろう。
だが、本当に久しぶりにチェリクの夢を見た。
幸福感が胸を満たし、これだけでしばらくは不器用な居候（いそうろう）——見た目だけは青年に見える子供だ——の失敗にも寛大（かんだい）に対処してやれるだろうと思った。
だが……なぜだろうか、胸の奥のざわめきが消えない。
心の一部が何かを叫んでいる。泣きたいほどに喜んでいる。
思い当たる節（ふし）などないというのに——どうしてかしら、と首を傾げたとき、一瞬だけ触れた気配に全身が総毛立（そうけだ）つほどの衝撃を受けた。
まさか、そんな——そんなことが。
だが、この歓喜、この熱、この震え——これは、チェリクと出会った時に感じたものと全く同じだ。
自分でも信じられない。けれど本能が告げているのだ。
何より大切なあの存在が近づいている、と。
「チェリク……が？」
旺李が呟いた時だった——遠くない場所から、聞き覚えのある青年の悲鳴が聞こえてきたのは。

それは短く——本当に短く、マンスラムが気づき身を起こした時には消えていた。
どくり、と脈打つのはマンスラムの心臓か、それとも旺李のものなのか。
緊張した空気が、一瞬にして周囲を満たした——。

# あとがき

この本が発売される頃、世間は秋真っ盛りかと思いますが、みなさまいかがお過ごしでしょうか。

こんにちは、前田珠子です。

破妖の剣『鬱金の暁闇』第七巻をお届けいたします。

前回貧血と謎の激痩せ（あと少しで三十キロ台になるところだったのです、恐ろしい）のせいで、本編が進まず申し訳ないことをしてしまいました。

今回はそのようなことがないよう（体重も無事増えました）頑張りました。

そうは言っても謝らなければならないことがあるのは前回と同じでして……申し訳ありません！　またしても紫紺の妖主にまでアーゼンターラたちを辿り着かせることができませんでした。おかしい……プロット通りに展開しているのに。次こそは対決させます（でないといつまでも鬱金のクライマックスに突入できませんので）！

今回はヒロインたちの保護者連がけっこう出張った展開になりました。特に古株連は若者で遊ぶのが楽しくて仕方ない様子ですが、如何でしたでしょうか、ご意見ご感想お待ちしており

ます。

最近の近況は我が家の野生の王国日誌になりかかっておりますが、最近またしても珍事がありました。

我が家の裏山に面した木陰でぼーっとしながらネタを考えていた時のことです。突然山のほうからどすどすと何かが駆け下りて来る音が聞こえました。隣家の犬がよく出入りしてるので、その子が駆け下りてくるのかと振り返ったところ——なんと狸が斜面を駆け下りてくるではありませんか！　真っ昼間なのに、なぜに狸が!?　と呆然としていたわたしの実に二十センチほどの横を狸は駆け抜けて行きました。母に話したところ、そんな場面に遭遇したことはないそうで……わたしはもしかしたら珍事に縁があるのかもしれません。

今回も挿絵の小島榊さんをはじめ、関係各所の皆様に大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

それではまた次の本でお会いできますように——。

平成二十二年　秋

前田　珠子

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などにはいっさい関係ありません。

**まえだ・たまこ**

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『聖石の使徒』シリーズ、『天を支える者』シリーズ、『空の呪縛』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、今ではすっかり実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



——破妖の剣　6——
**鬱金（うこん）の暁闇（ぎょうあん）7**

**COBALT-SERIES**

2010年11月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　前田珠子
発行者　太田富雄
発行所　株式会社集英社
〒101—8050
東京都千代田区一ツ橋2—5—10
(3230)6268(編集部)
電話　東京(3230)6393(販売部)
(3230)6080(読者係)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2010　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

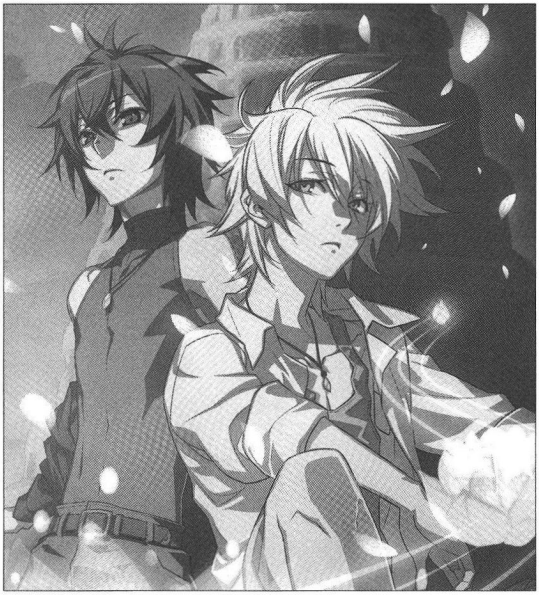
ISBN978-4-08-601460-1 C0193


禁断の暁闇 1~6
うこんのぎょうあん
破妖刀に選ばれし少女よ…
愛と正義のために闘え！
破妖の剣 6
前田珠子
イラスト／小島 榊
破妖剣士として、伝説的な死闘を勝ち抜いたラス！　しかし実父の配下に狙われ、紅蓮姫奪還チームに追われたラスは闇主と共に…!?
コバルト文庫
好評発売中


破妖の剣 外伝
珠玉の超(スーパー)ファンタジーに酔いしれよ!!
言ノ葉は呪縛する
義父レンバルトを密かに想う少女リエンカ。ある夜、レンバルトの秘密を知ったリエンカは…!?
紅琥珀(こうこはく)
異形を仮面で隠した人々が棲むアルバワヌの里で、逃走中のラスと闇主は…!?
前田珠子
イラスト／小島　榊
好評発売中
コバルト文庫


前田珠子
イラスト／山本鳥尾
聖石の使徒
シリーズ
選ばれし子供たちが、世界を守る――!!
其は焔をまとう者
其は力を放つ者
其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ
其は水に遊ぶ者Ⅰ・Ⅱ
揺籃の瞳
蒼の組木箱
狩人の爪
狩人の覚悟
コバルト文庫
好評発売中


コバルト文庫
好評発売中
本好き少女の
波瀾万丈ファンタジー！
前田珠子
イラスト／明咲トウル
天を支える者
天を支える者1～4
天を支える者 古恙唄1～5
天を支える者 罠は、蜜の味
天を支える者 緑風に誘われ
天を支える者 緑の糸をたどって
天を支える者 緑蘿の檻に囚われ
天を支える者 緑玉の枷に繋がれ
天を支える者 緑の鈴を、振る
天を支える者 空に響く緑の鈴音



# シュバルツ・ヘルツ ゲスタァン

## —アンコールの現人神(あらひとがみ)—

**桑原水菜** イラスト／中村龍徳

今明かされるアドルフとケヴァンの出会いや、皇帝になる以前のアドルフの活躍、アイザックとケヴァンが巻き込まれた大事件など、超騎士(ズバア・リッタア)の活躍を多数収録。特別書き下ろしも。

〈シュバルツ・ヘルツ—黒い心臓—〉シリーズ・好評既刊　イラスト／夢花李・中村龍徳

シュバルツ・ヘルツ —黒い心臓—
ワルキューレの雪騎行
アリアドネの糸車
シヴァの踊る森
燃える湖底のラム（前編）（後編）
神々の脈拍 vital.A
神々の脈拍 vital.B
神々の脈拍 vital.X
神々の脈拍 vital.XX(ダブルエックス)
シュバルツ・ヘルツ ゲスタァン
シュバルツ・ヘルツ ゲスタァン
—カラクムルの機械神—
監獄のファラオ
亡国のハガラズ
オーディンの熱き鼓動

好評発売中 コバルト文庫



ヴィクトリアン・ローズ・テーラー

# 恋のドレスと湖の恋人

青木祐子 イラスト／あき

闇のドレス一派が表舞台から姿を消し、リンダからクリスを取り戻したシャーロック。戦いで負った傷を癒すあいだ、恋人たちの間には甘く、穏やかな時間が流れていき……。

〈ヴィクトリアン・ローズ・テーラー〉シリーズ・好評既刊

恋のドレスとつぼみの淑女
恋のドレスは開幕のベルを鳴らして
恋のドレスと薔薇のデビュタント
カントリー・ハウスは恋のドレスで
恋のドレスは明日への切符
恋のドレスと硝子のドールハウス
恋のドレスと運命の輪
あなたに眠る花の香
恋のドレスと大いなる賭け
恋のドレスと秘密の鏡
恋のドレスと黄昏に見る夢
窓の向こうは夏の色
恋のドレスと約束の手紙
恋のドレスと舞踏会の宵
恋のドレスと宵の明け星
聖者は薔薇にささやいて
恋のドレスと追憶の糸
恋のドレスと聖夜の迷宮
恋のドレスと聖夜の求婚
恋のドレスと月の降る夜

好評発売中 コバルト文庫



# 風の王国 王太子の花嫁

## 毛利志生子 イラスト／増田メグミ

シャンシュンから帰って一年。翠蘭とソンツェン・ガムポ大王の再婚が迫っていた。大王の体調が思わしくないと知った翠蘭は、息子ラセルの花嫁候補に会いに行くのだが…？

〈風の王国〉シリーズ・好評既刊

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 風の王国 | 月神の爪 | 臥虎の森 | 金の鈴 | 砂の迷宮 |
| 天の玉座 | 河辺情話 | 花陰の鳥 | 嵐の夜(上)(下) | うつつの夢 |
| 女王の谷 | 朱玉翠華伝 | 波斯の姫君 | 星の宿る湖 | 水面の花 |
| 竜の棲む淵 | 目容の毒 | 初冬の宴 | 黄金の檻 | |

好評発売中 コバルト文庫



# 鳥籠の王女と教育係

## 恵みの環の魔王

**響野夏菜** イラスト／カスカベアキラ

アレクセルの誕生祝いが近づく中、ある出来事でゼルイークが魔力を封じられてしまった。
そして王女エルレインは250年の時を遡り、呪いを受ける前の恋人ゼルイークと出会い!?

〈鳥籠の王女と教育係〉シリーズ・好評既刊

婚約者からの贈りもの
魔王の花嫁
永遠の恋人
姫将軍の求婚者
さよなら魔法使い
嵐を呼ぶ王子

好評発売中 コバルト文庫



# 悪魔のような花婿（あなた）
## 遅れてきた求婚者

松田志乃ぶ イラスト／有村安息日

悪魔伯爵ウイリアムと結婚し、新婚生活を満喫中のジュリエット。ある日、貴族の代表者が城に集結することになったが、何者かの魔術でウイリアムが１２歳の姿に戻ってしまい!?

〈悪魔のような花婿〉シリーズ・好評既刊

**悪魔のような花婿（あなた）**

好評発売中 コバルト文庫



# ブランデージの魔法の城
## 魔王子さまの帰還

**橘香いくの** イラスト／石川沙絵

いまだ父王と和解していないドナティアン・シャルル。しかし、アドリエンヌと正式な結婚をするために、一度父と会うことに。久々に赴いた宮廷で彼らを待っていたのは…？

〈ブランデージの魔法の城〉シリーズ・好評既刊

**ブランデージの魔法の城** 魔王子さまの嫁取りの話
**ブランデージの魔法の城** 魔王子さまと鏡の部屋の秘密
**ブランデージの魔法の城** 魔王子さまの最強の敵

好評発売中 コバルト文庫




# 氷雪王の求婚
## ～春にとけゆくものの名は～

湊ようこ イラスト／由利子

「氷雪王」と渾名される冷酷な若き皇帝エドリックの妃に望まれたのは、地方伯の娘に過ぎないアイリスだった。縁談を断れず輿入れしたアイリスだったが、夫であるエドリックは彼女に王妃としての務めを果たすことだけを求め、少しの愛情も示すことはなくて…。

好評発売中 コバルト文庫




# 鬼舞 見習い陰陽師と御所の鬼

瀬川貴次 イラスト／星野和夏子

幼い頃から不思議な物を見ることができた、特異体質の道冬。陰陽師を志し、京の都へ修行にやってきたのはいいけれど、安倍晴明の息子・吉昌に何故か気に入られてしまった。他の陰陽師見習いからは嫉妬された挙げ句、鬼にも襲われ——陰陽師への道は前途多難!?

好評発売中 コバルト文庫

コバルト文庫　雑誌Cobalt

# 「ノベル大賞」「ロマン大賞」募集中！

集英社コバルト文庫、雑誌Cobalt編集部では、エンターテインメント小説の書き手を目指す方々のために、広く門を開いています。中編部門で新人発掘の性格もある「ノベル大賞」、長編部門ですぐ出版にもむすびつく「ロマン大賞」。ともに、コバルトの読者を対象とする小説作品であれば、特にジャンルは問いません。あなたも、才能をこの賞で開花させ、ベストセラー作家の仲間入りを目指してみませんか!?

**大賞入選作　正賞の楯と副賞100万円**（税込）

**佳作入選作　正賞の楯と副賞50万円**（税込）

## ノベル大賞

【応募原稿枚数】４００字詰め縦書き原稿９５枚～１０５枚。
【しめきり】毎年７月10日（当日消印有効）
【応募資格】男女・年齢は問いませんが、新人に限ります。
【入選発表】締切後の隔月刊誌『Ｃｏｂａｌｔ』１月号誌上（および12月刊の文庫のチラシ紙上）。大賞入選作も同誌上に掲載。
【原稿宛先】〒１０１－８０５０　東京都千代田区一ツ橋２－５－10
（株）集英社　コバルト編集部「ノベル大賞」係
※なお、ノベル大賞の最終候補作は、読者審査員の審査によって選ばれる**「ノベル大賞・読者大賞」**（読者大賞入選作は正賞の楯と副賞50万円）の対象になります。

## ロマン大賞

【応募原稿枚数】４００字詰め縦書き原稿２５０枚～３５０枚。
【しめきり】毎年１月10日（当日消印有効）
【応募資格】男女・年齢・プロアマを問いません。
【入選発表】締切後の隔月刊誌「Ｃｏｂａｌｔ」９月号誌上（および８月刊の文庫のチラシ紙上）。大賞入選作はコバルト文庫で出版（その際には、集英社の規定に基づき、印税をお支払いいたします）。
【原稿宛先】〒１０１－８０５０　東京都千代田区一ツ橋２－５－10
（株）集英社　コバルト編集部「ロマン大賞」係

**応募に関する詳しい要項は隔月刊誌Ｃｏｂａｌｔ（２月、４月、６月、８月、10月、12月の１日発売）をごらんください。**

9784086014601

ISBN978-4-08-601460-1

C0193 ¥467E

1920193004670

定価 本体467円＋税



コバルト文庫

史上最強の破妖の剣「紅蓮姫」の現・使い手ターラの死闘が続くなか、永い眠りから覚めたラスはセスランら旧い友人たちとの感動の再会を果たしていた。その一方でターラは、雛の君の差し金によって紫紺の妖主との闘いに臨むことになるのだが…!?　いまだかつてない激しい攻撃に、ターラは耐えることができるのか!?　そしてついに、母チェリクに導かれ、ラスが本来の力を発する時がきた…!?